

教職大学院 Newsletter No. 159

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.6.10（公開版）

学びを教師に取り戻す

独立行政法人教職員支援機構（NITS）理事長 荒瀬 克己

教員免許更新制が7月1日で廃止される。教師にとって大学等での更新講習は重要な学びの機会であった。最新の研究や専門家の知見を学ぶことに魅力を感じていた人も少なくない。ただ、免許更新のための受動的な学びになっていた面があった。10年に1度でよいのかという指摘もあった。

今後、文部科学省が示すことになるが、教職大学院や大学、研究機関、教育委員会、教職員支援機構（NITS）、民間事業者等が提供する多様な学習機会や学習コンテンツを集約し提供するプラットフォームの構築が予定されている。教師自身が、学習する必要があると考える研修や学びたいと思う事柄について、容易に閲覧や選択ができるようになる。

加えて、研修履歴受講管理システム（仮称）が新たに整えられる。教師自身の学びの記録であると同時に、教師と校長がその教師のキャリア形成について面談することにより、受講すべき研修内容などの指導助言の機会にも活用されることになる。

さて、このごろ教職について話すとき、どうもネガティブな内容が多くなりがちだ。たとえば、何が原因で教職離れが進んでいるのかは想像に難くないといった話がそうである。

健康にも影響する過酷な勤務実態。真面目に取り組もうとすればするほど多くの仕事に振り回され、子ども一人ひとりに誠実に向き合うための時間が確保できない。急かされて学校からは出ても、持ち帰っての仕事がいっぱいで、自分の時間や家族との

時間を削らざるを得ない。睡眠も足りなくなる。疲れがどんどんたまって、翌日の授業や学級経営に支障をきたす。

そもそも、超過勤務の実態に見合う、労働の対価としての正当な賃金が保障されていないと言わざるを得ない状況である上に、実際の超過勤務を申告できないといった理不尽な職場さえあるという。

教育基本法は第9条において「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」と示し、第2項では「前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない」とするが、「自己の崇高な使命を深く自覚」する心の余裕はなく、「その身分は尊重され、待遇の適正が期せられる」見通しが実感できない。

内容

巻頭言	(1)
スタッフ自己紹介	(3)
院生自己紹介	(5)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(23)
金曜カンファレンス/インターン報告	(28)
4月合同カンファレンス報告	(31)
ラウンドテーブル 2022 Spring sessions 振り返り	(38)
ラウンドテーブル 2022 Summer sessions 案内	(51)

これでは、免許更新制のあとを受けて今後いっそう重視されていく「研修」を、重しのように感じる人が少なくないとしても、無理がない。

学習指導要領前文にある「自分のよさや可能性を認識する」ことを子どもたちに働きかけるのは教職員であるはずだが、その教職員の自己肯定感が危ういように感じる。人間は自己肯定感が低くなると、しだいに周囲との関係を保とうという意思が希薄になっていく。教職員もしかり。注文や文句はあっても、感謝やねぎらいの言葉はあまり聞けない。孤立状態が進む。居場所が見当たらず、何とかしようという意欲がわかず、やりがいが見いだせない。

かつて高校の校長をしていたときに財務官僚と話したことがある。ずいぶん前のことで記憶が都合よく整形されているかもしれないが、この人はある意味で明快であった。教師が授業以外のことに時間を費やしているとしたら、それは教師にとっても子どもにとっても残念なことで、文部科学省から、学校にもっと事務職員やスクールカウンセラーなどの専門職員を配置することが必要だと聞いているが、なるほど妥当なことだ、と話していた。中高の教師の持ち時間はもっと増やすべきだと言うので反論したが、少なくとも彼は、教師が何でもかんでもやる仕事ではなく、高度な専門職であることを明確に認めていた。

学習指導要領は、主体的・対話的で深い学びを通して子どもたち一人ひとりに、これからの社会を幸福に生きていくために必要な資質・能力を養うことを求めている。昨年1月の「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中央教育審議会答申は「はじめに」に、「一人一人の子供を主語にする学校教育」と書いている。子ども自身が学び、学び合い、自ら力を付けていく過程を重視するという意味だろう。その実現に向けて日々の学校教育を担う教師にとって、どのような学びの在り方が望ましいか。

何よりもまず、学びを教師に取り戻すことが重要だ。読書、思索、同僚との対話はもちろん、研究会や研修への参加により、教師自身が主体的・対話的で深い学びを通して、高度な専門職としての力を確かなものにしていくことが求められる。そのために

は、誇りを持って、安心して学べる環境が欠かせない。当然、学校設置者である教育委員会や管理職の責任が問われる。保護者や地域社会の理解を深めることも重要だ。

学習指導要領解説総則編は学校段階の別なく、「生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている」として主体的・対話的で深い学びについて解説しているが、繰り返し一つひとつの言葉を丁寧に吟味する必要がある。その際、子どもの学びはもとより、教師の学びにも重ね合わせていくことが重要だろう。たとえば「深い学び」の〈問題を見いだして解決策を考える〉ということは、学校の、学級の、授業の、あるいは、一人の子の学びの〈問題を見いだして解決策を考える〉ことに繋いで読むのはどうか。

学校や子どもの現状はどうなっているか。たとえば「問題」があっても、見ない限りは見えてはこない。教職員それぞれが情報を持ち寄り共有することで、学校や子どもの現状が初めて見えてくる。「問題」が学校として認識されるようになる。いわば、組織としてのメタ認知である。

組織としてのメタ認知に基づいて、どのような目標を設定するか。どう取り組むか。取り組みをどう改善するか。教職員それぞれが考えを重ね合って、学校をつくり続けていく。そのための対話の場が校内研修だ。

今後の教職員の学びの中で、校内研修はいっそう重要な意味を持つことになる。どのような校内研修を積み重ねていくか。これまでのありようを見直して、実質的、実効的な校内研修をデザインしていく必要がある。NITSとしては、福井大学教職大学院からも多く学び、これからの校内研修の姿を模索していきたいと考えている。

「顧客」の満足は「従業員」の仕事に対する満足によってもたらされるという。品物やサービスを提供する職業の話だが、子どもたちに学びの場を提供する教職員ならばなおさらだろう。子どもの学びへの意欲が増すのは、教職員のやりがいや充実感があってこそではないか。

学び、学び合える子どもに育てるための教職員集団をつくる。それには、教職に対する周囲の理解と、

多様な学びを支えるための仕組みが不可欠だ。



スタッフ自己紹介



福井大学連合教職大学院 非常勤講師 春日 伸友

今年度、非常勤講師として勤務させていただきます春日です。昨年度、福井大学教育学部に嶺南地域枠ができ、そちらの担当をさせていただいた

ご縁で、今年度は福井大学教職大学院でもお世話になることになりました。

私は数年前に教員を定年退職したのですが、新採用は昭和54年、ちょうどその年に養護学校が義務化され、美浜町に新設された嶺南養護学校（現在の特別支援学校）でした。

教職員のうち今で言うなら特別支援の専門は若手教員の一部だけで、障害のある児童生徒の教育に関しては経験がない教員も多かったというのが当時の実状です。私はというと専門は物理であり、養護学校での教育がどのようなものか、全くわからない状態でした。また、養護学校の校舎は真新しく、既成の教材教具は一応揃っていましたが、様々な発達段階の子どもたちにとって本当に役立つ教材であるはずがなく、学習内容や子どもたちに合った教材を試行錯誤しながら、学校全体としても手探り状態のように始まった1年目でした。ただ、ベテランも若手の教職員も自分たちがこの学校の伝統を一から作っていくのだという気概があったように思います。

児童生徒の把握、授業の進め方の研究、教材制作等に没頭する日々を経て、学校がある程度軌道に乗ってきた頃、校内研修会で県外先進校視察の報告会がありました。生活単元学習という授業を、緻密な計画の下で実践している学校の報告でした。現在、特別支援を行っている学校では生活単元学習は当然のこと

ですが、その当時は児童生徒の学習の柱となる画期的な新しい授業として驚きをもって受け止められました。これこそが求めていたもので、この方向で進もうと管理職も含め教職員全体が一つになった感覚でした。

その後、学校全体で生活単元学習に関する研究・実践が数年にわたって活発に行われ、私も三方五湖での魚釣り単元や、遠足単元での近辺 JR 駅を調べる単元等の構成や授業内容を作り上げたことを思い出します。この教職員全体が一つの方向を目指すことになった校内研修会と、生活単元学習に関する研究・実践を行い、子どもたちの生き生きとした活動を追い求めた7年間は私の教員としての原点だと思っています。

その後は主に嶺南の高校の教員として勤務することになります。若狭高校では、自分の専門の物理の授業を行う中で、いくつかの研究実践を行いました。

まずは、円運動を LED の点滅を制御して説明する装置を作成し、この装置をパソコンで制御するインターフェイスも作成、授業で活用することが出来ました。その延長で、様々な測定装置を IC 等を組み立てて作成しました。例えば音声やうなり波形、電磁誘導の電圧の変化等を入力してその波形をパソコンのディスプレイに表示したり、重力加速度を測定しデータやグラフに表示したり、ボイル・シャルルの法則や断熱変化等の圧力と温度の関係をグラフ化したりという具合です。「パソコン計測入門—理科学習で利用できるパソコン計測—」という本も出版することも出来ました。

それまでは自分なりに努力していても、自分の得意とするものがないと感じていたのですが、自分の専門分野の計測に関するこれらの研究とそれを授業に応用することで初めて自分の強みが出来たように感じました。また、数年にわたり全国理科大学等の研究会に参加し、県内だけでなく、県外の理科教員と様々なつながりを持ち、意見交換することが出来たことも大きな成果でありました。

その後、教育研究所勤務、嶺南東特別支援学校校長を経て、小浜水産高校校長になり、小浜水産高校の119年の歴史に幕を下ろす閉校という役割を果たすことになりました。水産高校には教師を始め、様々な職種の教職員が勤務しており、彼らと学校の歴史が閉じる時を共にしました。当時、水産高校の生徒たちは地域の中で生き生きと活動しており、それを支えてくれたのが積極的かつ個性的な教職員たちでした。とんでもなく強烈なエネルギーで生徒や地域とつな

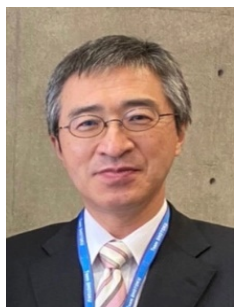
がっている若い教員を目の当たりにし、管理職の最大の役割は、意欲のある教員が思う存分力を発揮できる職場を作ることであると改めて感じました。

水産高校閉校後は若狭高校の海洋科学科へとつながれることになったのですが、その若狭高校では、退職後も生徒たちの探究活動を手伝わせてもらっています。また、嶺南東特別支援学校にもご縁があり、思い出深い二つの学校に今でも関わらせていただけていることに感謝しております。

養護学校でも、高校においても、教員生活を通して生徒と向き合いながら、研究し実践することを繰り返してきた自分にとりまして、福井大学教職大学院で再び意欲溢れる院生の皆さんの研究のお手伝いをほんの少しでもさせていただくことができれば大変うれしく思います。院生のみなさんと一緒に、私も学ばせていただきたいと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

今、私の心にあること

岐阜聖徳学園大学 教育学部 准教授 福地 淳宏



「私は、どんな事があっても子供達の笑顔を守り抜くために、岩手県の教員を志望します。私は、小学校5年生の頃、東日本大震災を経験しました。周りが大変な状況の中、家も家族も無事だった私は、『自分なんか泣いたり辛いといったりしてはいけない』と、本当の気持ちを押し殺し毎日を過ごしていました。しかし、学校が始まったその日に、私の顔を見るなり、『生きていてくれてよかった』と泣きながら抱きしめてくれた担任の先生のおかげで、震災後初めて素直に泣くことができたことを今でも覚えています。職場の復旧につきっきりだった両親に代わり、先生は何よりも心の支えで、ふと思い出すその温かい経験が、教師への強い憧れに変わりました。私は、あの時生かされた命を大切にして、今度は岩手県の子供達の成長を全力で支えていく覚悟です。」

これは、この3月に本学の教育学部を卒業した学生が、岩手県の教員採用試験で語った志望動機です。故郷を一人離れ、本学で四年間学び、見事に新規採用教員として地元へ戻っていきました。コロナ禍ということもあり、思うように実家にも戻ることができず、苦勞したと聞いていますが、震災に見舞われた小学校5年生当時の担任の先生からいただいた温もりを支えに、仲間と共に夢を実現しました。今、故郷の岩手県で、あこがれの教員として第一歩を堂々と刻んでいます。

岐阜聖徳学園大学は、毎年300名ほどの学生を教員として現場に送り続けており、その人数と高い教員就職率は、本学の強みと言われています。その力の源泉として、教育学部には、豊富な体験活動に基づき、教員を目指す目的意識と力を入学後の四年間を通して「結晶」のように高めていく「クリスタルプラン」があり、教員スタッフによる支援体制が敷かれてい

ます。同時に、それらの様々な体験活動の円滑な実施を支えたり、教員採用試験に向けた具体的なキャリア支援を実施したりする事務職員サイドのサポート体制が充実しています。まさに教職協働による教員養成に取り組んでいるわけですが、実は、私は、昨年度末までの2年間、本学の就職課長という事務職員の立場で、学生の教員就職に向けた支援に取り組んでいました。またそれ以前は、23年間の学校現場と15年間の教育行政、合わせて38年間、岐阜県の教職員として勤めてきた経験があります。教育学部出身でもなく、授業や学級経営など右も左も分からなかった自分でしたが、多くの子供たちや保護者の方々、地域の皆さんと出会い、そして赴任する先々で素晴らしい先輩の先生方に支えていただき、最後は、地域の中学校で校長として終えることができました。この4月からは、そういった学校や教育委員会における自分自身の実務経験が、少しでも教員養成にお役に立つのであればという思いで、学生たちへの指導に当たっています。果たして、自分が教員を目指していた若き頃、冒頭で紹介したような切実感あふれる高い志をもって教師を目指していたかどうかは甚だ疑問です。しかし、今回、岐阜聖徳学園大学の教壇に立つことや、本連合教職大学院のスタッフとして

院生の支援に関わらせていただくことも、すべて自分をここまで育てていただけたことに対する「恩返し」のつもりで取り組んでいます。言い換えると、「恩送り」として、次世代の教員として旅立っていく若者たちへ「未来を託す」思いを込めて、日々の業務に当たっています。

教員採用試験の採用倍率の低下について、学校における労働環境の改善や教員の質の向上と併せて大きく話題になっています。しかし、少なくとも、本学には、なんとしても教員になりたい、教員になって児童生徒の未来づくりを応援したいと真剣に願う学生がたくさんいます。連合教職大学院へ入学しておられる院生の皆さんも、教育に対する熱意と改革心と使命感を胸に、自らの学びをさらに深めようとしておられる方ばかりだと思います。ぜひとも、冒頭で紹介した彼女のように、「今の学校現場で通用する力を備え、これからの教育の創造に貢献する教師」「新しい時代に生きる子供たちの未来づくりを応援する教師」として、一人でも多くの学生が、出会いを心から楽しみにしている子供たちが待つ「学校現場」へと飛び立っていくことができるよう、その勇氣ある一歩を応援し続けたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



院生自己紹介

前号から数回にわたって新しい院生の自己紹介を掲載しています。今回は、教職開発専攻ミドルリーダー養成コースの16名です。



今井 悠介 いまい ゆうすけ

今年度より2年間、教職開発専攻ミドルリーダー養成コースでお世話になります、今井悠介（いまいゆうすけ）と申します。福井県高浜町立高浜小学校に勤務しています。今回、教職大学院で学ぶ機会をい

ただいたことに感謝し、2年間で多くの方々と交流し、様々な実践に触れて学びを深めていきたいと思っています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

私は、初任校の敦賀市立松原小学校に5年間、母校である高浜町立高浜中学校に7年間、現在の勤務校である高浜小学校に1年間勤務した後、一度学校現

場を離れました。高浜町住民生活課に派遣され、派遣社会教育主事として3年間、高浜町三松センター（隣保館）に勤務しました。三松センターは、高浜町の人権啓発・人権教育の中心となる社会福祉施設であり、三松センターを拠点に町民や町内勤務者等への人権啓発を行うことが仕事の中心でした。学校現場では、子ども達や保護者との関わりが中心でしたが、三松センターでは、地域の方々や町職員、人権団体関係者との関わりが多く、教員としての仕事内容とは大きく異なるものでした。人権とは何か。どのような人権侵害が存在するのか。その原因は何か。どうしたら人権侵害や差別を無くすことができるか。そしてそれは無くせるものなのか……。関係者とあらゆる議論をし、考え、そのための具体的な施策に取り組んできた3年間でした。地域の方々、町職員、県内および全国の人権団体関係者の方々との出会いや交流。どれも学校現場では経験できない貴重な財産となり、私にとって非常に有意義な3年間でした。

今回、4年ぶりに学校現場に戻ると同時に、教職大学院での学びの機会を得たわけですが、年度初め4月の1ヶ月間は、久々の学級担任、日々の授業、その他の校務分掌など、目の前の業務に手一杯で全く余裕がありませんでした。教職大学院で学ぶことに対しても、何をどう研究していけばよいのか、自分の目指すべきはこれだという明確なものが見えていないのが正直なところです。しかし、開講式や4月合同カンファレンスでは、先輩の研究実践を読み込んだり、その学びを語ることで共有したりすることができました。1日の中でもサイクルごとに違うグループメンバーでのセッションを繰り返すことで、自らの見聞を広げたり、他者から多くの刺激を受けたりする

ことができたと感じています。今後、合同カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座等に参加することで、多くの実践や考え方を知って学びを得ると同時に、自分自身の実践の方向性も明確にしていきたいと考えています。

教職大学院に限ったことではありませんが、現在のコロナ禍では、研修や会議など様々な機会において、対面とZoom等を用いたオンラインでの参加がハイブリッドで行われています。私は、開講式と4月合同カンファレンスには対面で参加しました。この2回の参加で強く感じたことは、やはり現地で面と向かって話をした方が多くの学びを得られるのではないかと思います。とはいえ、オンラインで一度も参加していませんので、明確に比較はできませんが……。実際に、開講式や合同カンファレンスに参加するまではとても不安で緊張もしていましたが、現地に足を運んでみると、その場の空気を肌で感じ取ることができ、また旧知の間柄との思わぬ再会などもあり、とても安堵感を得ることができました。高浜から福井大学までは、移動に2時間以上かかります。しかし、多くの方々と直に顔を合わせた方が得られることが多いのではないか、協働による学びは大きいのではないかという思いから、今後もできるだけ対面で参加しようと考えています。

これから訪れる多くの出会いや学びを楽しみに、2年間の研究に励んでいきたいと思っています。今は学校現場で日々の業務を行うことで精一杯の現状ですが、走りながら少しずつ考え、振り返りながら前に進み、進むべき方向やその先の目標を明確にしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

尾崎 由美 おざき ゆみ



この春から、教職開発専攻ミドルリーダー養成コース・1年履修で学ぶことになりました尾崎と申します。ここにあげさせていただいた写真は、とうもろこしの皮むきをした

ときの私です。子供たちに学校給食を作る工程の一角に関わってもらうことを目的に小学1年生と「皮むき体験」をしました。子供たちはもちろん、まわりの教員も巻き込み、とてもわくわくした楽しい活動であったことを思い出します。私は、このように子供も大人もわくわくする活動が大好きです。

では、このような被り物をしている私は一体何者なのでしょう。私は、2000年に福井大学で採用されました。2005年の食育基本法制定、栄養教諭制度施行に併せ、2006年から現在の義務教育学校に籍を置き、2016年より附属特別支援学校に勤務し7年目になる栄養教諭です。私は、学校給食の献立作成から始まり、衛生管理、給食管理など学校給食に関係するマネジメント全てと、食に関する指導を行っています。その中で、私が大事にし、心がけていることは、もちろん、一番は安全で安心できるおいしい給食の提供になるのですが、その学校給食を中心に、子供たちが食に興味・関心を持つことができるような取組や関わりをつくることです。例えば、学校給食を学校の行事や子供たちの活動につなげたり、教科や絵本、ある時は当時の校長先生の出身地等にもつなげたりしました。日本を飛び出した時もあります。APECに絡めた時は、福井大学国際課に協力の依頼をし、集まってくれた留学生たちを自宅に招き、自宅台所でその国の料理を留学生と一緒に作りながらレシピを習得しました。それらを給食に提供しながら、子供たちと留学生のお互いが異文化を交流する企画も計画し実施しました。また、子供たちが興味・関心を持つことができるような校内掲示や教材作りにも力を入れています。給食については、人間本来が持つ五感を働かせることができる、まずは「おいしそう」から始まる給食を目指しています。「からだ育て」=「こころ育て」。こころが豊かに感じることができる給食、そのような学校給食と子供たちへの関わりを今も変わらず大事にして仕事をしています。



普段、子供たちを見ていて感じることは、子供には一人一人に必要な種と学びの芽があるということです。子供たちのうれしそうな顔、わくわくする顔が見たいという思いを持って子供たちと関わり、そこから始まる学びの種まきをしていきたいと思います。そして、どんな時も、また、どんな子供にも、教師主導ではなく、子供の目線になって関わっていききたいと思っています。

学校の中で私は、担任につくこともありませんし、教科専門の教諭でもありません。複数配置の職種でもありません。このような私が教職大学院で何を学ぶのか。何を身につけていきたいのか。学校は、職種、性別、経歴、専門性、知識、世代等、様々な人たちが混在し、多様性を持ち合わせた組織です。この多様な専門職との世代を超えた学び合いが実践されている現場の中で、一人の栄養教諭として、他教諭と同じ線上に立ちながら、違う視点で物事を見つめることができる力、また、他教諭とは線や距離、視点を変え、俯瞰しながら組織を見て他者と関わるができる力が必要だと考えています。

特別支援学校では、校務分掌も小学部から高等部の教師が混ざり合って組織に割り当てられており、私もその一員です。たくさん目で子供たちを見ています。栄養教諭としての根となる部分(給食マネジメント)は今までと変わらず大事にしながら、他教諭と連携し、特別支援学校という学校と子供たちを支え合う組織の中で、「子供たちの自主的な学びを支える教師」の一員として一緒に学校を作り上げていく力を、今回の教職大学院の出会いの中で見つけ、学び、身につけていきたいと思っています。

この1年間、できるだけたくさんの方に出会って学んでいきたいと思っています。皆さまどうぞよろしくお願いいたします。



小泉 真由子 こいずみ まゆこ

初めまして。この度、福井大学連合教職開発研究科ミドルリーダー養成コースに入学いたしました小泉真由子と申します。取得免許は高等学校一種（商業）、高等学校一種（情報）です。静岡県出身で、現在は静岡市立清水桜が丘高等学校に勤務し2年目になります。清水桜が丘高校は、清水商業高校と静岡県立庵原高校が合併し今年10年目となる普通科、商業科を併設する学校です。現在は2年生の担任、吹奏楽部・バドミントン部の副顧問、そして研修課では総合的な探究の時間の企画立案を担当しております。この「探究学習」が今の私の一番の課題であり、この大学院で学んでいきたい分野です。

教員となり約20年。これまでの教員人生を振り返ると、私は現在の勤務校は講師時代を含めると7校目の学校となります。静岡県は横に広く、東・中・西部といったように大きく三つに分けられます。採用となった初任は東部地区の観光地である伊豆地区でした。現在の学校は県内の中心地である中部地区になります。静岡県の中でも地区によって教育への価値観など様々な状況が違い、それによりそれぞれの学校では抱える課題も違います。その学校ごとで奮闘する多くの先生方と出会い、教科指導や生徒指導など多くのことを勉強させていただくと共に仕事への向き合い方を学ぶことができました。また、何よりもたくさん子どもたちと出会い、「教師」として成長させてもらえました。これまでの経験は私の財産であり私の教員人生の礎となっています。

今回、大学院に入学するきっかけとなったのは昨年度この大学院を修了されました静岡県立駿河総合高等学校の遠藤健先生との繋がりででした。遠藤先生とは同期であり赴任した富士市立高等学校では一緒に働くことができました。そこは富士市立吉原商業高校から「探究学習」を軸とした新高校への改革に直面している学校でした。「探究学習」に取り組む委員会が設置されたり、職員全体が探究学習を勉強し新たな学びに取り組み始めたりと、これからの教育や

学びの在り方を新たな視点で学び経験することができました。しかし、私は新高校になり2年目の1年生の担任を担当した後に転勤。探究学習の面白さを学び感じ始めたところでの異動は非常に残念ではありましたが、幼い子供を育てながら仕事と家庭の両立にも悩んでいた時期だったため通勤時間が半分以上短縮される異動は私が生活をする上では何より有難かったです。異動先は単位制による定時制課程の学校でした。ここでは「本当の学び」とは何か、「普通」とは何かに向き合うこととなり、私自身の中で教科指導や生徒指導などの価値観が大きく変わりました。そんな中、年次（学年）主任を任され4年目が終了する時に、民間企業等長期派遣研修の辞令が私のもとにきました。いわゆる、1年間民間企業で働く、ということです。私は地元で歴史があり地域密着型金融機関である静岡信用金庫様にお世話になることになりました。ここで、企業人の皆様と出会い仕事に向かう姿勢や意欲などの基本的な考え方を学び直し、多くの職業人や地域の皆様と出会うことで、企業が求める人材とは「自ら課題を発見し考察しながら解決に向け行動を起こすことができる人」なのだと認識することができました。そして学校が、さらには自分の教科である商業こそがいかに関社会と繋がらなければいけないのか、「本当の学び」とは何か、を感じることができました。私は企業の立場で学校との繋がりを試み、富士市立高校で転勤以降お会いすることがなかった遠藤先生とも久々に再会することができました。遠藤先生は私が転勤後、指導主事を経験され知識も経験もとても深いです。そんな遠藤先生が教職大学院で改めて学んでいることを聞き、正直驚きとともに心から尊敬しました。純粋に、私も学んでみたい！とその時に思い、現在に至ります。ただ、大学院受験を決めるまでには正直不安もありました。仕事をしながら自分にやれるのか、何より家庭を犠牲にすることはないだろうか、と迷い悩みました。しかし遠藤先生からもこの連合教職大学院の学校拠点方式というシステムの良さを聞いた時に、むしろ現在抱えている「探究学習」のことをさらに広い視野で

学ぶことができ多くの方々と繋がることのできることで、私自身の成長に繋がるのではと直感することができました。

今年度、本校で走り出したばかりの探究学習の担当者として、現在多くの壁にぶつかりながら取り組んでいます。職員全体の意識改革のところでは非常に苦戦を強いられている状況もありますが、学校組織の在り方を学びながら新しい学びを取り入れる挑

戦をしていきたいと思います。そして、日々の実践を繰り返しながら、その時に感じたことや考えたことなどを記録し続け、振り返り、この大学院での学びを充実したものにしていきたいです。そして私の学びが少しでも学校組織に、教育現場に還元できるように努めたいと思います。どうぞこれからよろしくお願いいたします。



辻岡 美希 つじおか みき

今年度よりミドルリーダー養成コースに所属することになりました、辻岡美希と申します。よろしくお願いいたします。

奈良女子大学で幼稚園教諭免許を取得後、同附属幼稚園で20年ほど勤務しています。途中家庭の事情で保育現場を離れ、奈良女子大学で教務補佐をしていましたが、幼児教育への思いが忘れられず、再び同じ幼稚園に戻って4年目になります。

勤務している幼稚園は、国立大学法人の附属幼稚園として、子どもにとってよりよい幼児教育を目指し、研究や教員養成の役割を大事にしてきました。保護者にも本園で大事にしていることを定期的に伝え、保育にも参加してもらうなど、理解を求めてきました。本園の教育方針に共感し、多くの保護者に園の教育に積極的に協力いただいています。奈良県は共働き世帯が少ない傾向があったため、教育熱心で園の保育に参加できる余裕がある家庭が多かったことも一因かもしれません。ところがリーマンショック以降共働き世帯が増えたことで、他園より保育時間が短いことや、子どもとの対話や体力づくりを目的として公共交通機関で通園することを大切にしていることなどが、便利さを求める保護者には通いにくい条件となっています。昨年度から限定的に預かり保育を始めるなど、保護者に寄り添う施策を実施していますが、様々な面で便利さを求める声は上がってきています。

私自身、家庭と仕事の両立に悩みながら、我が子については預かってもらう条件を優先し、自分が望ましいと考えている幼児教育を受けさせることができなかったことにジレンマを感じてきました。保育所の待機児童が増え、とにかく子どもを預かる場を増やそうとする方針によって、幼児教育に質より量が求められてきた時期であったことも要因であったかもしれません。

そういった背景から、本園の目指す教育を大切にしながら、保護者の思いを受け止めつつ新たな施策を考えていく必要性を感じてきました。コロナ禍の影響もあり、これまで対面で毎月行っていた教育説明会を動画配信にしたり、クラス懇談会や個人懇談をオンラインで実施したりすることで、保護者の負担が減ったという評価もいただいています。一方で、園内への立ち入りを制限していたことで、実際の保育を直に見られず、保育についての意図が伝わりにくいことも出てきました。園の教育方針を伝えるために、伝え方の工夫をしてきましたが、対面でゆっくり話を聞く機会が減り、こちらの考えを一方向的に伝えることが多くなったことで、保護者の疑問や思いを十分に受け止めきれていなかったのでは、と感じるようになりました。

幼児教育は家庭との連携なくしては成立しません。現在本園では、子どもの思いから保育を作っていく「子どもスタートの教育」を進めており、その時期に育てたい資質能力を軸にして、目の前の子どもに合わせて経験内容を工夫しています。園と家庭が同じ

方向性で子どもを支えるためには、その時々での方針や教育内容を家庭と共有する必要があります。そのためには、園が一方的に良いと考えていることを押し付けるのではなく、家庭での経験やアイデアを活かしていける姿勢が大切なのです。ただし、家庭と協働するにあたっては、園として、教師個人として、ここだけは大切にしていきたいという核を意識化しておく必要があります。

現在、本園では園内研修として、担任、補助などの立場の違いを超えて日々対話する機会を設けることで、それぞれがそれぞれの立場で、自分の教育観をもって保育に携わる大切さを実感しています。互いの考えを出し合うことで、自分の中でこれまでの考えが変化し、学びが深まっていく面白さを感じてきま

した。教職大学院で学ぶ中で、さらに違った立場や教育観の方と対話することで、自分自身が教育の中で大事にしていることを言語化し、保護者と協働して子どもを支える体制を作っていきたいと考えています。そのためには、自分の考えを相手に伝わる言葉で瞬時に紡ぐ力と、相手の考えを受け入れながら自分の考えを変えていける柔軟性が必要だと痛感しています。これまで、自分の経験だけで自分なりに考えを作っていましたが、教育に関する理論や世界的な教育の傾向などを学び、自らの経験につなぐことが足りていなかったように思います。2年間の学びの中で、文献研究や対話を通してより広い視野で自分の教育観を見つめ直し、深めていくことができるよう、精進したいと思っています。



村橋 義人 むらはし よしと

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました村橋義人と申します。福井大学教育学部附属幼稚園の所

属で、今年度4歳児担任をしています。私が附属幼稚園に赴任したのは、この4月からで、これまでは福井県と京都府の県境に位置する「高浜町」という人口1万人ほどの小さな町の公立保育所で9年間保育士として働いてきました。現在は、私自身が生まれ育った「高浜町」に、妻と子どもたち（4歳・1歳）を残し、単身赴任で、福井市での新たな生活をスタートさせています。

なぜ私が附属幼稚園に赴任し、同時に教職大学院に入学する運びになったかと言うと、それには高浜町の公立保育所の保育実践研究が関係しています。高浜町では、平成27年より子どもの主体性を引き出す保育を目指して、研究を進めてきました。その実践研究の助言者として、福井大学教職大学院の岸野麻衣准教授にお世話になることになりました。当時は、自分が福井の地に来ることなど、まったく想像して

いませんでしたが、今思い返してみると、岸野先生との出会いがきっかけだったのだと思います。そこから、高浜町の公立保育所では、教職大学院や附属幼稚園のことが話題として出るようになり、高浜町の保育をより良くしていく取り組みの1つとして、附属幼稚園での勤務・教職大学院への入学、という道が開かれることになりました。このような流れから、2年間という期限ではありますが、この福井の地で学ばせていただくことになりました。岸野先生との出会いがあったからこそ、県内の幼児教育の先進である附属幼稚園に勤務しながら、教職大学院に通うという、より深く学ばせていただける境遇に立てたのだと思います。最終的な目標は、高浜町に戻り、教職大学院と附属幼稚園での学びを返していくことです。同時に自分のスキルアップと附属幼稚園の保育の質の向上にも努めたいと思っています。

私は去年30歳になり、30代になったことで一応は「ミドルリーダー」と呼ばれてもいいような年齢になってきました。しかし、附属幼稚園を含め、教職大学院のたくさんの先生方からすれば、まだまだ若輩者だと思います。ですが、その分、謙虚な姿勢で多く

の方の話を聞き、先生方の経験や考えなどに触れることで、自分自身のスキルアップに努めると共に、「どんなミドルリーダーになっていきたいか」という部分についても考えていきたいと思っています。まだまだ現段階では、ぼんやりとしたイメージしかありませんが、そのイメージを少しでも形にできればと思います。

それと同時に、自分自身の今までの保育をゆっくりと省察し、論理的に考え、さらなる学びへと繋げたいと思っています。思い返せば、9年間、時間に追われながら、保育所で保育士として日々子どもたちと関わる中で、しようと思えばできたのかと思います。残念ながらできていませんでした。そんな経験ができていたら、保育に対する考え方や、子どもたち一

人ひとりの育ちもまた変わっていたのかなと少し反省もしています。しかし私は幸運なことに、保育者として迎える10年目のこの節目に、この福井に来ることができ、それをきっかけにその事実気付くことができました。

この2年間で出会う、たくさんの方々との出会いを通し、再度自分の保育を振り返ることで、保育者として新たなスタートを切りたいと思っています。そして、口下手な私が、初めて出会う人に「自分の保育はこうだ」と自信を持って言えるような人になれるくらい、精一杯学んでいくことを自分に誓って、自己紹介とさせていただきます。

期待だけでなく、不安もたくさんありますが、どうぞよろしくお願い致します。



矢成 清美 やなり きよみ

本年度4月よりミドルリーダー養成コースに入学いたしました、江東区立深川第二中学校美術科の矢成清美と申します。平成元年に大学

卒業後総合職として30年間、民間企業数社に勤務し、令和元年に期限付教員として現任校に配属され、翌年同校に正規採用されました。中学校教諭一種免許状(美術)、高等学校教諭一種免許状(美術)を大学時に取得しております。

初めに、私が民間企業から教員となった経緯についてお話ししたいと思います。私には発達障害を持った弟がおり、幼少時から弟のケアをしていました。現在でいう「ヤングケアラー」であったのですが、当時はそのような言葉がない時代でした。家族を守りたい一心で、弟の特性への理解および協力を周囲へ求めていました。その結果、少しずつではありますが、理解が深まったと感じました。その経験を活かし民間企業では総務、人事、人材教育、経理など社員を陰から支える業務に従事してきました。平成とは「バブル崩壊」「失われた10年」「自然災害の多発」など予測困難の時代であったと思います。その中で仕事

を続けていくことができたのは幼少時から培った「希望を持って自分の役割を果たす」「出会ったすべての方に感謝する」という信念があったからこそです。30年に渡るさまざまな人々との交流の中で、自分が生きているうちにできることは何であろうと自問自答し「50歳になったら美術を通じて社会貢献しよう」と考えるようになりました。そして現在に至るのですが、ゆくゆくは特別支援学校もしくは特別支援学級への勤務を希望しています。

次に現任校に着任してから心がけていることをお話しします。私が初任で担当した学年は、少し元気の良い集団でした。初めて教員になった私は、授業中も立ち歩き指示に従わない子供たちに面食らったのを覚えています。こちらから近づこうすると離れていき、距離を置くとぶっきらぼうな言葉を吐きながら近づいてくる、という生徒たちの予測不可能な動きに困惑し、なかなか信頼関係を構築するのが難しく壁に何度もぶつかりました。意気消沈した私に自然と与えられた役割は「登校はできるが教室に入れない心の問題を抱えた生徒との交流」でした。校内にある別室で、自分の授業がない時間は、そのような生徒の自習を監督し給食を一緒に食べ、美術の作品作り

を手伝い、帰りは下駄箱まで見送りました。生徒たちへ心がけていたのは「褒めること」です。少し経つと、同じような問題を抱えた生徒が一人、また一人と別室にやってきました。ふだん素行があまり良いとは言えない生徒も、小さなコミュニティの中では穏やかでした。その中で当該生徒の保護者の方と接する機会が増え、生徒の学校での様子を逐一報告しました。「一生懸命自習をしている」「給食を残さず、綺麗に食べることができる」「今日は1回だけ教室に上がった」など些細な事でも担任や保護者と共有しました。小さな成長をつぶさに観察し、そして共有できる環境が私に自信を与えてくれました。次にやるべきは授業改革の着手です。規律が整っていない学年の授業には、担任や管理職の先生に入ってもらいながらグループで制作活動をすることにしました。グループになるとかえって落ち着かないと思い避けていたのですが、実際に役割分担をした上で活動すると、役を担って動いてくれました。生徒たちがグループという小さな社会で責任感を持った瞬間であったと思います。これはいつか社会人になり就労する生徒たちの初めの一步なのだ、と感じました。私は改めて教員は、生徒の10年先20年先を見据えて就労の意義を一緒に考え、社会の一員として人生を豊かに過

ごしていくその礎を担っている素晴らしい仕事であると痛感しました。初任時にこれに気づけたのは幸いであると言えます。

最後に教職大学院で学修していきたいテーマです。現任校で美術部の顧問であり、総勢40名の部員を率いています。美術が好きな生徒が集まっているのは勿論のこと、中には個性的な生徒も数名おります。部員たちにいつも伝えているのは「他者理解」の精神です。学年を越え、性別を越え、それぞれの個性を越え、みなで作り上げる共同制作を定期的に提案し、校内掲示をしています。この制作物は美術部以外の生徒も教員も参加できる仕掛けが特徴で、去年は学校全体300名余りが参加し完成することができました。このように美術の作品制作を通じて、「お互いの違いを認める」「さまざまな特性を個性として認める」などを目標とした授業作りを研究のテーマとしたいです。また江東区独自の「こうとう学びスタンダード」で推進している基本的な生活習慣や授業規律をさらに浸透させ、将来のあるべき姿を想像および創造できる柔軟な思考を定着していく手立てを探究したいです。まだまだ経験不足ではありますが、諸先生方のご指導を賜りたくどうぞ宜しくお願いいたします。



横田 和也 よこた かずや

皆さん初めまして。今年からミドルリーダー養成コースでお世話になる横田和也です。小浜水産高校に1年、若狭高校全日制に1年、若狭高校定時制に

2年、講師として勤めた後、敦賀南小学校で3年間、新採用として勤務しました。その後、若狭高校に異動し、現在7年目を迎えます。

講師経験が長かった分、様々な学校を経験させていただきました。どの学校でも共通して感じたことは、児童・生徒たちの自己肯定感の低さでした。今振り返ると、現場に出てから今まで、児童・生徒の自己肯定感をどのように高めるかを考えながら教育に取

り組んできたように思います。しかしながら、その時その時は目の前のことに必死で、理論を学んだり、自分の実践を振り返ったりして、自身の教育観や授業観からスキルに至るまであらゆる面のアップデートをしてこなかったように思います。

30代半ばになり、若狭高校に腰を落ち着けて勤務するようになってから、ふと自身の学びの浅さを感じるようになり、閉塞感のようなものを感じるようになりました。一方、一昨年度から2年間持ち上がりで担任したクラスの生徒の意欲的に学びに向かう姿に刺激を受け、私も再度、じっくりと学びを深めたいと考えるようになりました。そのような中で、幸運にも若狭高校には、福井大学教職大学院で学ばれた

先生方が複数いらっしゃいました。その先生方からのアドバイスもいただき、今年度こちらでお世話になることになりました。

私は、地理歴史・公民科を担当しています。今年度は、1年生を担当していることもあり、新科目「歴史総合」を主に担当しています。これまでは日本史を主に担当してきました。日本史の授業では、ペア学習やグループ学習、chromebook の導入に伴いプレゼン発表なども取り入れています。中心は従来型の講義形式の授業でした。しかし、新科目に変わるにあたり、授業のマイナーチェンジではなく、フルモデルチェンジが必要であると考えました。歴史学習において、教員の説明を極力減らし、生徒が主体的に学ぶためにはどのような授業をデザインすればいいのかを研究したいと考えています。また、観点別評価の導入に伴い、評価のための評価ではなく、教員の授業改善につながり、生徒の成長につながるような評価の在り方を授業デザインとセットで研究したいと思っています。

その際に意識したいことは、本校での探究学習との連携です。本校では、国際探究科・理数探究科・普通科・海洋科学科の全学科で、1年次より、教科「探究」（科目名は学科により異なる）を行っています。私は主に、国際探究科の「国際・社会探究」に携わっ

てきました。探究学習では、生徒の興味関心を大切に、「問い」を重視した課題設定能力の育成に重点を置いています。また、ルーブリック評価を中心とした評価の在り方も研究してきました。これまでは、この探究学習と教科学習の連携が十分でなかったように思います。新科目「歴史総合」をはじめ、来年度には、「日本史探究」などの新科目も始まります。教職大学院で、授業や評価の在り方を研究するにあたり、本校が培ってきた探究学習の授業設計や評価の在り方と関連付けながら、教科学習と探究学習の双方がさらにブラッシュアップできるように研究を進めていきたいと思っています。

この原稿を書かせていただく前に、4月カンファレンスを受講しました。日常(現場)から離れ、教職大学院という場で、じっくりと資料や実践報告を読み、様々な校種・立場の方々と対話を重ねる経験がとても新鮮でとても大きな刺激をいただきました。この2年間、現場での実践はもちろん、多くの先生方との出会いを大切にしながら、様々な場面で対話をさせていただき、視野を広げ、考えを深めていきたいと思っています。

これから2年間、どうぞよろしくお願いいたします。



Nathaniel Venezuela Teocson

Please call me Nate. I was born in the Philippines, and was raised there until moving to Canada at seven years old.

I feel lucky having lived in Toronto, the largest city in Canada, and among the most multicultural cities in the world. Throughout my life, I have been plagued with uncertainty and indecisiveness; and so, my path towards teaching was neither clean nor straight.

Growing up with a strong sense of justice and empathy, I wanted to become a police officer. After graduating from high school, I attended a two-year

Police Foundations program at a college. Through the program, I was able to learn from and interact with teachers who had actually served as police officers or who were actively working within law enforcement. I greatly appreciated my teachers' openness when imparting their wisdom and sharing their personal experiences in law enforcement. But upon completing the program, I became hesitant on a career in policing. Regardless, I felt that I still wanted to have a career involved with helping others.

While working full-time as a Security Supervisor, I entered York University in Toronto, as a part-

time undergraduate student of Psychology. Along with adjusting to a more academic environment, it was a long and continuously challenging but fulfilling journey. I had many opportunities to learn about a massive variety of ideas, concepts, and opinions. It was also during university that I had discovered the Japan Exchange and Teaching Programme.

Japanese culture has been a constant influence throughout my life. As a child in the Philippines, I fondly remember rushing to get home with my friends, to watch a new episode of Kamen Rider Black. During elementary school, I had thoroughly enjoyed a school trip to the Japan Canadian Culture Centre, where I was formally introduced to Japanese culture. During high school, I enrolled in a weekly Japanese class with friends who also enjoyed Japanese pop culture. And while studying at university, I was an active volunteer at the Japan Foundation Toronto. And so after I finished my studies at York University, I decided to apply to the JET Programme, and successfully started my career as an Assistant Language Teacher in Fukui Prefecture from July 2016.

My ALT career began at Tannan High School, in Sabae city, Fukui prefecture. Like many ALTs, my role was to create and execute activities to give students more opportunities to use English, or to interact with foreign cultures. At this school, most of the students would either go straight into the workforce, or attend a junior college. Because of this, there was less focus on academic English. And so, my focus as an ALT was to evoke and maintain the students' interest in foreign (mostly Western) cultures, through the English language. At the same time, I tried my best to tie the activities to whatever topic the students were currently studying. For example, during a unit in the textbook that featured Charlie Chaplin, I gave an

interactive presentation about his life, showing many photos and videos of his performances. During Christmastime, I introduced how the holiday was celebrated in the Philippines, Canada, and other countries, and even brought my own guitar to the school to play some Christmas songs.

After working at Tannan High School for four years, I was given the opportunity to work at Koshi Junior High School, located within Fukui city, which is where I am working now. As an ALT, my responsibilities were more or less the same. A unique feature at Koshi Junior High School is regarding its Basic English Expression course (基礎英語表現). Commonly referred to as "Eihyo" (英表), it is a weekly supplementary English course for all the JHS students. For the first and second-year students, the course is administered by myself, while another ALT exclusively administers the course for the third-year students. In other words, I create the Eihyo curriculum, solo-teach the classes, regularly give out and check homework, create and evaluate tests, and assign grades to students at the end of each term. There are certainly times when the workload across my Eihyo classes and team teaching classes can feel overwhelming, but at the same time, it invigorates me.

Although the path leading up to teaching English in Japan was a bit messy, fraught with hesitation and indecisiveness, I have firmly resolved that a career in teaching is of the highest calling for me. This resolve is a driving force that led me to enter graduate studies. Through the next two years, I intend to expand and improve my skills as a teacher, for the sake of my personal and professional development, and equally, for the sake of the students that have been entrusted to me by the school and local community.



兼井 智加 かねい ちか

ミドルリーダー養成コースに入学しました兼井智加と申します。専門教科は英語です。高校生のころ、夜ご飯がカレーになると、母の同僚

の ALT が我が家に食事をしに来ました。彼がわたしに母国スコットランドでのホームステイを紹介してくれたことをきっかけに、初めての海外生活を経験することになりました。意気揚々と日本を旅立ったわたしでしたが、当時はインターネットも携帯電話もなく、すぐにホームシックになりました。そんなわたしを見かねてか、ホストマザーは醤油風味の焼うどんを作ってくれました。海外での日本の味。彼女の心遣いに世界共通の人の温かさを感じました。

それ以降、世界の人々とつながった職に就きたいという思いをもって、愛知県の大学、大学院へと進学しましたが、いつもわたしの行動を消極的にさせたのは、英語への自信のなさでした。特に、大学院では、教育をはじめとする自国の様々な課題を解決しようと高い志をもった多くの留学生たちと刺激的な学生生活を送った一方で、興味のある内容であっても英語での講義や演習は避け、大学院のプログラムにあった海外フィールドワークにも、結局参加できずに終わりました。

大学院修了後は地元である福井県大野市に U ターンし、母校の中学校に講師として勤務しました。地元のよさを感じながらも、やはり、自分のやり残した留学生活への思いが日に日に強くなっていきました。1 年後、講師をして貯めたお給料を軍資金としてカナダのバンクーバーへ旅立ちました。最初の半年間は、語学学校で英語漬けの学生生活を送り、後半は現地の旅行会社でインターンシップを経験しました。平日は、バンクーバー市街の語学学校を徒歩で何カ所も訪問し、ツアーの営業活動をしていました（おそらく、人生でいちばん痩せていた時期です）。そして、週末はツアーに添乗し、カナダやアメリカの大自然や異文化の中で様々な経験をすることができました。中でも忘れられないのが、ブラジル人留学生に同行

したウィスラーへのスキーツアーです。「雪のない国に帰る前に、初スキーに挑戦したい！」その思いは素晴らしいものでしたが、世界的に有名な超広大なスキーリゾート・ウィスラー。No スキーウェアで転がりながら滑り続ける留学生に同行し、わたしもやっとの思いで生還しました。明るい気質なのか、それとも、新しいことに挑戦するワクワク感なのか。彼は弱音を一つも吐かず、ずっと笑顔で転がり続けていたことが印象的でした。

その後、異国で職に就き、自分の生活基盤を一から築き上げるという勇気はなかったので、1 年で帰国しました。帰国後、当時のアルバイト先の店長から、地元の FM 放送局で契約社員を募集している知らせを聞き、働くことになりました。週 1 回オンエアされる地域の情報番組を制作・放送するスタッフとして、日々、地元大野の素晴らしい人や物に出会い、これまで知らなかった地元の魅力に出会う機会を頂きました。特に、機材を担いで、マイクを持ちながら、大野が誇る日本百名山、荒島岳に登頂したことが思い出です。また、アクセント辞典を片手に、日々、日本語（標準語）の発音と戦ったことも貴重な経験となりました（今はまた訛っています）。

どっぷりとローカルに浸かった環境の中でも、海外とつながった仕事に就くという夢は諦めきれず、その後、留学生を支援する大学職員を目指しました。しかし、採用試験の最終選考で不合格でした。そのとき、すでに、28 歳になっていたわたしにも、さすがに焦りがありました。その不安な気持ちを紛らそうと幼稚園からの同級生に電話をしました。すると、その友達は「学校の先生になったら、子どもと世界の架け橋になれるんじゃない？」と言いました。彼女の言葉は、教師を教える仕事としか捉えていなかったわたしの視野を一気に広げるものでした。その瞬間、グローバルとローカルの間で紆余曲折してきた自分の人生の中にあった点と点が、すべて一本の線でつながるような感覚をもてたのです。

あれからちょうど 10 年。教員生活の節目の年に教職大学院で学ぶ機会を頂けたことに大変感謝して

います。毎月のカンファレンスや集中講義などでの一回一回の出会いを大切に、自己研鑽に励んでい

ればと思います。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。



Anuniwat DHANACHAT

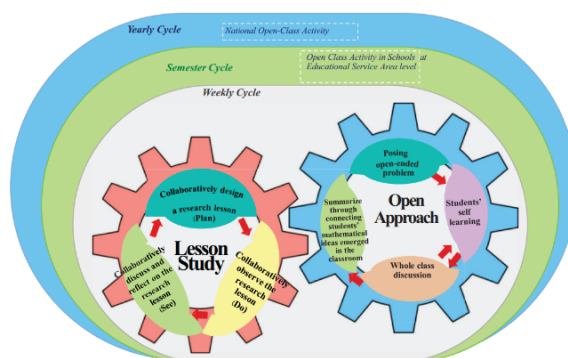
Greetings to all:) I'm delighted to meet all of you, the wonderful people here at DPDT. I am Anuniwat DHANACHAT.

Presently, I am a newcomer to a first-year master's course student in the Middle leader teacher course at the Department of Professional Development of Teachers (DPDT), Graduate School Education, University of Fukui. Under the full supported scholarship from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT), Japan. From this semester, interning at the Compulsory education school, attached to the School of Education, the University of Fukui, in Grade 6, focusing on mathematics class.

In 2021, I graduated from the Department of Mathematics Education, Faculty of Education, Khon Kaen University, Thailand. During 2018-2019, I received the scholarship from Sato Yo International Scholarship Foundation (SISF) to join the 1-year exchange program at Yamagata University. I also got a chance to join the English classroom at the elementary school attached to Yamagata University. Now, I am a licensed teacher in Thailand, qualified to teach Mathematics Subject at all levels of education.

Since 2015, I have been involved in the Lesson Study and Open Approach (The problem-solving teaching approach that emphasizes open-end question/task/problem situations) from my first year of study as part of my teaching professional learning journey. Furthermore, from the first to the fifth year, there are prerequisite learning activities for various purposes in the teaching profession as follows. School visits for multiple purposes were conducted from the first to the fourth year of study, and a year of school practicum was completed in the final year

of study. These activities gradually thrive me through my learning journey during my bachelor years for the beginning of lifelong learning. Besides, I am also experienced in international and national academic conferences.



The Thailand Lesson Study and Open Approach; TLSEA (Inprasitha, 2010 cited in Inprasitha, 2022)

From now on, my new chapter is benign. But to be honest, when people ask what you want to learn from DPDT? (Majority of questioners expect the respondent to answer them with something related to rigid knowledge or process that they wish to obtain) For me, I could not straightforwardly tell myself what I wanted? (Wired, right?) However, one thought that sprang to mind was that I wanted to do what the Japanese do in their everyday classes. Because I trust that when we experience something by ourselves, we will know there are difficulties in doing something.

In other words, I am keen to acquire about when Japanese teachers encounter the challenging and how they handle it. Last but not least, I hope that the internship period will benefit me in understanding the complexities of classroom teaching to enable exploring somehow of the interconnection of teaching and learning.

These will be a tremendously important foundation for my future career. At last, Hopefully, struggles and doubts will force me into who I am in the future.

Reference

Inprasitha, M. (2022), "Lesson study and open approach development in Thailand: a longitudinal study", International Journal for Lesson and Learning Studies, Vol. 11 No. 5, pp. 1-15.

<https://doi.org/10.1108/IJLLS-04-2021-0029>



荒 通雄 あら ゆきお

私は、福井校成幼稚園で4歳児の担任をしています。今回、ミドルリーダー養成コースで学ぶ機会を頂きました。

実は、私は昨年の3月まで東京の杉並区にある佼成育子園という保育園に勤務して

いました。福井校成幼稚園と佼成育子園は、法人は異なりますが関連法人としての交流があり、一昨年の6月に双方の間で職員交換交流の話がもちあがりました。私は、その話の翌日に参加したい気持ちを固めました。福井県にはこれまで縁が無く訪れたことはありませんでした。しかし、自分の人生に悔いの残らないようにしたいという思い、それと自分自身の可能性を伸ばすチャンスだと考えチャレンジすることにしました。

初めての北陸、福井県は自然が豊かで子どもたちものびのびと園生活を楽しむ姿が印象的で、子どもたちと一緒に楽しく毎日を過ごすことが出来ました。そんな時、昨年の夏頃に大学院での学びの場があることを伺い、このことも先ほどと同様な意味で学びたい思いを伝えました。

私は、これまでに何度か「自分はこの仕事に向いているのか」と考えることがありました。そんな時に学ぶ機会を得たのが、カウンセリングでした。私は「カウンセリングとは、人の悩みを解決してくれる場」と限定して考えていました。ところが実際は違いました。カウンセリングを学ぶ中で、カウンセラー自身がクライアントと一緒に成長することが大切であることを知りました。そこで、ワークショップなどで仲間

の話を聴いたり自分のことを話したり、様々な考え方や生き方を学ぶことが出来ました。その過程で、私は、自分自身のことを認めていなかったことに気付きました。自分の現状や努力して来たことをありのままに認めることが出来ると、とても気持ちが楽になり、心の余裕を感じられるようになりました。それは学んだ3年間という時間と共に学び合えた仲間のおかげだと思っています。

さて、子どもたちと接して8年目となります。子どもたちとふれていて感じることは、「私が固定した考え方が強い」ということです。福井に来てあらためてその事を感じました。東京にいた一昨年、コロナ禍の中、一時的に、電車通勤から自転車に切り替えました。それは公共交通機関を利用した場合は、勤務することが出来なかった時期があったからです。自転車で通勤すると、周囲の草花が沢山、目に入り、何も知らない私は、草や花について少し学んでみました。そして、近くの公園に咲く花と同じものを園庭に植えたり、プランターには、雑草プランターと名づけ様々な草花を植えたりしました。また園庭に生える木々の名前を調べることや、園庭マップ作成なども行い、草花の名前も書き記していくなど自然の草花にとっても興味を持ち始めました。

福井校成幼稚園では「おひさまガーデン」という広い庭があり、自然に多種多様の草花が咲く場所があります。それで福井の子どもたちは自然について色々なことを知っていると思いこんでしまいました。昨年、5歳児の担任でカブトムシの幼虫を育てていた際、子どもたちの中で「カブトムシは何を食べている

のか」という話題になりました。すると「ゼリーだよ！」と答える子どもたちに私はとても驚きました。福井は自然が豊かだから子どもたちも自然や生き物に対して興味を持ち東京の子どもたちより虫に詳しいという一方的な思い込みがあったのです。

そんな私の頭の固さを柔らかくするために、子どもたちの言葉一つひとつを大切に受けとめ、子ども

たちに関わることを意識していきたいと思います。

私は、これからの学びの中で教育関係・子どもと関わる関係の方々との出会い、触れ合いを嬉しく思います。これらの機会が私の視野を広め、固定観念がより柔らかくなるのではないかと大いに期待しています。どうぞよろしくお願いいたします。



水谷 雅典 みずたに まさのり

今年度、福井大学連合教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学した水谷雅典です。現在は私立の岐阜聖徳学園高等学校で、1年生特進コースの担任をしています。教科は理科で、主に化学基礎と化学を担当しています。

私は大学を卒業後、新卒で現在の職場に就職し、今年で教員生活5年目を迎えます。1年目は3年生の副担任を務め、2年目からは、3年間持ち上がりで進学コースの担任を務めました。この4年間で振り返ると、職場でも自宅でも教材研究に多くの時間を費やし、生徒が興味関心をもって学びに向かえるよう、自分なりに試行錯誤を続けた時間であったと感じます。また、特に昨年は、担任をした生徒の進路実現のために、進路指導の勉強やデータ収集に明け暮れた1年間だったと感じます。

教職大学院への入学を決意したのは、今年の9月頃です。就職後、自分の授業力の低さや専門性の低さ、担任としての確かな進路アドバイスができないなどの無力さを痛感する毎日で、「いつか時間ができたら学びたい」と思っていました。しかし、日々の仕事に追われ、なかなか教職大学院で学ぶことに踏み出せませんでした。そんな中、昨年、3年間持ち上がりで見てきた生徒が、受験シーズンを迎え、夜遅くまで学校に残って勉強をしたり、毎日分からないところを質問しにきたりする姿を目にし、自分もこの子たちに負けられないように勉強しなくてはという思いに駆られました。そして、生徒の目標に向かう姿に励まされ、

教職大学院で学ぶことを決意しました。教職大学院では、自身の担当科目である化学の授業改善と、本校での探究活動推進の方法を探りたいと考えています。

本校の現状として、「化学」を受験に必要とする生徒は限りなく少なく、特に、個別試験で化学を必要とする生徒は、2%にも達しません(1~4人程度)。そのため、化学を履修する生徒のほとんどが、受験に化学を必要としていません。また、化学を苦手とする生徒も多く、学習意欲が低下し、定期考査で点数をとるためだけに勉強をする姿も見られます。就職してから4年間、受験や定期考査のために、苦しみながら勉強をする生徒を毎年のように見てきて、私は受験に化学を使わない生徒もモチベーション高く、ワクワクしながら学びを高めてほしいと考えようになりました。これまでも自分なりに試行錯誤してきましたが、失敗した授業をしっかりと振り返ったり、現在取り組んでいること、つまづいていることを教科会議等で共有して改善を図ったりすることはなく、毎年同じ失敗を繰り返すこともありました。そのため、教職大学院では、生徒が化学の授業にワクワクしながら参加し、もっと学びたくなる、知りたくなる、試したくなるような授業を展開する方法について、助言をいただいたり、省察をしたりしながら改善を図っていきたいと考えています。

一方、化学の授業改善は私自身の問題であり、学校のために自分が何をすべきかを考えていくことも大切なことだと思います。1~3年目の頃と比較すると、組織の中で自分に求められるものが変わってきたと感じています。就職して3年目までは、教科・担任・

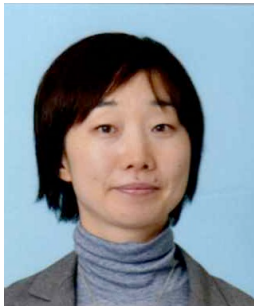
分掌・部活動のそれぞれの仕事に慣れ、ある程度一人でこなせるようにすることが最優先に求められていたことだと感じます。しかし、徐々に自分の仕事だけではなく、学校が永続的に生き残っていくために、本校の在り方を考え、積極的に行動を起こしていくことが求められるようになってきたと感じます。岐阜県でも中学校卒業予定者数が激減していく中で、私立高校がどのように生き残っていくかを考えるのは、管理職やベテランだけでなく、世代をこえて共に考え、案を出し、全職員で実行していかなければなりません。特に岐阜県は、私立高校はあくまでも公立高校の滑り止めという風潮が強く、行動を起こさなければ私立高校が生き残ることができないのは明らかなことです。

現在、本校では普通科と商業科があり、80%が普通科の生徒です。ボリュームゾーンである普通科の在

り方を考えることは、本校の将来像を検討する上で重要な課題であり、新カリキュラムの主旨を踏まえると、その方向性として探究的な学びを柱とし考えることが妥当であると考えています。普通科改革は本校でも他人事ではなく、地域社会の抱える諸課題や魅力に関連させた実践的な学びを取り入れること、複数の学問分野から再構築された総合的な知見に関する学びを推進するためには、どのようなシステムを取り入れ、どのような行動を起こしていくかを考えなければなりません。

教職大学院では、自身の授業を改善していくことは勿論、今後の本校の在り方を考えるために、他校でどのような実践がされているか、どのような課題を抱えているかを学んでいきたいと思っています。

よろしくお願いいたします。



千葉 美奈子 ちば みなこ

今年度よりミドルリーダー養成コースでお世話になります。千葉 美奈子と申します。大学卒業後、東京都の私立の中高一貫校、川崎の公立

中学校での勤務を経て国立東京大学附属中等教育学校で教鞭を執ってまいりました。昨年、当大学の福島昌子先生に教員としての悩みを相談した際、こちらの大学院を受けてみないかとお誘い頂き、入学を志望しました。それと同時に16年間勤めていた学校を退職し、今年4月より私立のカトリック系中高一貫の女子校にて新たな教師人生をスタートしました。

私からは、1. 自分が受けた教育、2. 国立での教員としての経験、3. 今後の抱負の3点について紹介、自己紹介とさせていただきます。

まず初めに私の教育観の土台となっている小中高時代に受けた学校教育についてお話しいたします。私は父親の仕事の関係で、小学校2年生から高校を卒業するまで、アメリカのロサンゼルス郊外で過ご

しました。小学校5年生までいた学校は、貧富の格差があり、ヒスパニック系、黒人、アジア系の生徒が多くいる地域でした。その学校で受けた授業で印象に残っているのは、日系2世の担任の先生による図工で日本の墨を使った授業です。ストローで墨を紙に吹きかけ、木の枝を描いた後、絵具で花を描きました。和と洋が融合した作品を見て、すごく感動したのを覚えています。また、東南アジアの民族舞踊を踊ったり、日本の歌を歌ったりする授業もあり、今振り返ると異文化理解教育が重視されていた学校地域だったと思います。

その後引っ越した地域の授業では、常日頃、学んだことについて意見を交換し合い、発表しました。例えば、アメリカ現代史を学んだ授業では、株価暴落の映像を含む歴史のドキュメンタリーを見て、当時の歴史の流れをまとめた後、実際に現在の株価で新聞を見て、株取引を経験しました。その時のクラスメートたちの驚きと興奮や先生から感じる熱意を今でも忘れられません。

次に国立東京大学教育学部附属学校（以後略して東大附属）での経験について紹介します。東大附属では、当時東京大学教育学部長だった佐藤学先生の「学びの共同体」の理論を導入した年に勤務し始めました。佐藤先生がコメンテーターを務められた授業公開後の検討会では、生徒たちの学び合いの様子を中心に教員間で話し合いました。その授業検討会で授業者を務めた時は、英語学習において学び合いを成立させる難しさが話題の焦点となりました。英語は1時間の授業の中で、基礎基本を身につけるための時間と実際に使う時間をバランスよく確保する必要があります。基礎基本を理解する段階では、4人で協同学習を行うと時間もかかり、少人数の話し合いで十分理解できるため、ペア活動を中心に行うほうが効果的ではないかというご意見をいただきました。学びの手法は、目の前の生徒たちに寄り添った臨機応変な形で取り入れることが大切だと実感しました。

退職するまでの数年間は研究部の一員として、学

校の研究全般に関わる仕事に携わる機会があり、コロナ禍で開催された公開研究会の運営の委員長を務めたときは、今までの当たり前を問い直し、新たな研究会の形式を、先生方と議論を重ねながら作り上げていきました。このように、東大附属では、生徒同士の学び合いだけでなく、教員同士の学び合いの大切さを日々実感してきました。

最後に今後の抱負について、福井大学連合教職大学院で学ぶ目的と共に述べたいと思います。これまでの20年間の教員生活では、日々のやるべきことに追われ、目の前の仕事をどうこなすかばかり考えていました。福井大学では、時間をかけて教職という仕事をじっくり見つめ直し、自分がなぜ教員になったのか、何を目指していくのか、その答えを見つけないかと思っています。また、生徒を見取る力を養い、長期的な視点に立って自分の実践を位置づけることができるよう、研鑽を積みしたいと思います。



藤森 香織 ふじもり かおり

はじめまして。今年度より、ミドルリーダー養成コースに入学しました、藤森香織と申します。よろしくお願いいたします。勤務校は、長野県岡谷市立川岸小学校です。天竜川が流れるほとりの学校で、近くにはつつじで有名な鶴峯公園がある自然に囲まれた学校です。

この仕事について16年目になりますが、正直、この仕事を楽しんだことがありません。毎日何かに追われ、思うようにいかない日々。今日の授業はどうだったか・・・ここがうまくいかなかった・・・またあの子を叱ってしまった・・・などなど反省の毎日です。教職大学院に入学しておいていきなりネガティブ発言をお許してください。やりがいはあるし、担任した子どもたちが卒業を迎えたときは涙し、子どもたちの笑顔や、できたことを一緒に喜び合える嬉しさや感動や達成感はたくさんあります。でもその

ことが「先生って楽しい！！」にはまだ結び付きません。思うようにいかないことを楽しめるようになったら「先生って楽しい！！」となるのでしょうか・・・。

さらに今年度、学年主任、研究主任という立場をいただき、より一層教師間の「協働」について考えるようになりました。今まで研究なんてとんでもないことだと思っていたし、頭のいい人がするものだと思っていました。指導案のたった一言について、眉間にしわを寄せながら、ああでもない、こうでもないと考えたり、研究授業で、子どもの言葉や様子を一字一句聞き逃すまいと、ひたすら授業記録をとっても、そこから子どもを見取って、具体の姿をどう意味づければいいのかわからなかったり（私の研究への向かい方にも問題があるのですが・・・）。そんな状況だったので、さてどうしたものか・・・どうすれば、先生方の学びが深まるか、子どもたちの学びが深まるか。一緒に教材研究をしたり、自分のクラスの子どもの具体の姿で語りアドバイスをしたりもらったり、試

行錯誤しながらやっています。何か活かせることが得られたり、「やってよかった」と思ってもらえたりすることがあればいいなと思っています。

そんな中で、今回、教職大学院で学ぶという機会に恵まれました。教職大学院での学びは「語り合い」だと思います。私自身、人前で話すことが苦手で、そのような場はなるべく避けてきました。しかし、初めて参加した2月のラウンドテーブルでは、これまでの自分の取り組みについて40分ほど語るという試練がやってきました。「40分も語ることはない・・・」と何を語ればいいのかわからず、不安でいっぱいでした。なんとか資料をつくり自分の取り組みを聞いていただきましたが、やっぱり、だんだん何を言っているのか、何を伝えたいのかわからなくなっていました。しかし、一緒にグループだった先生方はうなずきながら肯定的に聞いて下さり、私の取り組みを価値づけてくださいました。たとえ、話がまとまらなくても、聞いてくれる人がいて、答えてくれる人が

いて、それがこんなに楽しいことなんだということに気づきました。そして、自分の考えていることを言葉にすることで見えてくるものがあることも知りました。これは、教室でも同じことが言えると思います。「自分の考えを話そう」「友達が言ったことに反応しよう」「友達の考えを聞いてもう一度考えよう」授業でよく言っている言葉です。友達が自分の考えを聞いてくれる。うなずいてくれる。反応してくれる。だから安心して話せる。だれかと関わり合いながらの「学び」は楽しいものなのだと改めて思いました。そして、やっぱり私は、学ぶことが好きだということにも気づきました。

教職大学院でのこれからの2年間、たくさんの方と出会い、多くのことを学ばせていただけることを楽しみにしています。そして、いつか「先生って楽しい!!」と思える日が来るように、自分にできる最大限のことをやりながら、学び続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



稲川 理子 いながわ りこ

初めまして。今年度、福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました稲川理子（いながわりこ）です。

神奈川県にありますカリタス女子中学高等学校で英語科教諭として勤務しています。2人の子供（現在4歳の息子と2歳の娘）がおり、仕事に勉強に家事に育児に毎日バタバタとしながらも忙しい毎日を楽しんでいます。

私の勤務校であるカリタス女子中学高等学校についてご存じない方もいらっしゃると思いますので、まず簡単にご紹介します。カリタスは神奈川県川崎市にあるカトリックの私立女子中高一貫校で、中高全体で約1000名の生徒が在籍しています。

フランス語を公用語とするカナダのケベック州にある修道女会が設立した学校なので、外国語教育に力を入れており、中学では英語とフランス語を全員が学び、高校では英語またはフランス語を第一外国語として選択します。2016年度からは英語既習者クラス（アドバンストクラス）を設置し、私は2020年に育休から復帰してから毎年アドバンストクラスを受け持っています。また近年はICT教育に力を入れており、2年前から生徒は全員1人1台iPadを持って学習に活用しています（現高3は除く）。なお、同じ敷地内にカリタス幼稚園と小学校もあります。私は幼稚園から高校までカリタスで学んだ卒業生なので、人生の半分以上をカリタスで過ごしていることになります。

日々の授業の中で大事にしていることは、①生徒

主体の授業にすること②学びと評価の一体化です。①では学び合いを特に重視しており、このコロナ禍でなかなか難しい場面もありますが、ペアワークやグループワークを通じて生徒たちが自ら「気づき」を得られる授業作りを意識しています。②に関しては、生徒たちが定期的に自己の学習状況を把握・評価し改善していけるよう、「スタンプ&リフレクションシート」を作成し、振り返りを大事にしています。また、今年度から私が受け持っている中1・中2の英語では、授業開きで生徒たちに成績の評価基準を開示することにしました。今までもプレゼンテーション等の前にループリックを見せて評価基準を伝えることはしてきたのですが、成績のつけ方を開示したのは初めてなので、学期末に成績を付けるときにどういう結果が出るかドキドキしています。

私が福井大学に出願・入学しようと思った一番の理由は、過去に大学院に通って本当に良かったと思った経験があるからです。日々生徒たちに英語を教えていく中で、単発のセミナーや勉強会だけでなく英語教授法についてじっくり学びたいと考えるようになり、1人目の妊娠が分かったタイミングで思い切ってテンプル大学というアメリカの大学のジャパンキャンパス(TUJ)の大学院 教育学研究科修士課程に挑戦することに決めました。TUJではTESOL

(Teaching English to Speakers of Other Languagesの略語、英語教授法のこと)の理論と実践を体系的に学び、自分の授業の計画・評価・改善に役立てることができました。加えて、授業はもちろん全て英語でクラスメイトも外国籍または日本人でもネイティブレベルの現職の先生たちばかりだったので、英語力が大幅にアップしたことも大きな収穫でした。1人目の妊娠中に入学して、2人目の出産2ヶ月前に卒業試験を受験し、大変な日々でしたがそれ以上に充実した、学びが楽しいと思える2年間でした。

英語教授法の次は教育全般について学びたいという思いが芽生えてきて、校長先生からのお声がけもあり、この度福井大学に出願・入学することにしました。子供たちもまだ小さく、自分にできるかな…と不安でしたが、TUJでの経験もあり、行くなら今しかない!と思い切って飛び込むことにしました。これからの2年間でどんな学びを得ることができるのか、とてもワクワクしています。

教職大学院では、普段なかなかお会いする機会のない様々な校種・教科の先生がいらっしゃるの、本やセミナーだけでは学べない体験談を聴き、世界を広げていきたいと考えています。これからどうぞよろしくお願い致します。



五十嵐 浩介 いがらし こうすけ

今年度より、ミドルリーダー養成コースで学ばせていただく五十嵐浩介と申します。福井大学教育学部附属義務教育学校に勤務しております。どうぞ

よろしくお願いいたします。

私と教職大学院との出会いは、1年履修で参加した夏期集中講座でした。3日間のサイクルが3回あり、あれほどまでに濃密な時間を過ごしたことはあまり経験がありません。そこでは、伊那小学校の「学ぶ力を育てる」の実践報告書を読ませていただきま

した。伊那小学校の名前を知っている程度で、詳しくは知らなかった私にとって、この実践はとてもおもしろく、興味深いものばかりでした。ワクワクしながら読み進め、その場にいる子どものように実践に浸っている自分がいました。また、その集中講座では、様々な先生たちと交流し、経験や考えを共有し合うことができました。普段の学校現場では交わることのない校種の先生もいらして、それぞれの先生の見方・考え方に触れることができ、とても貴重な時間となりました。このような集中講座を夏と冬に経験し、教職大学院は教員として、人間として、自分の可能性

を拓いてくれる場所なのではないかと感じています。

さて、教職大学院に入学するにあたって、自分自身が大事にしてきたことを思い返してみると、「児童理解」「授業追究」「教師の協働」が特に大事だと感じています。目の前にいる子どものことをしっかりと受け止め、一人一人をよく理解することが、よりよい学級をつくり上げ、さらにはよい授業をつくっていく土台となっていくと考えます。そして、「おもしろい授業をしたい」という思いを持ち続けています。教材や題材について調べ、発問・問いの適切さを考えることは授業をする前にはよく行うようにしています。さらには、子どもだったらどう考えようとするのか、というように子どもの思考の流れを予想し、学習活動の展開を工夫するように心がけています。とは言っても、よい授業というものはすぐにはできないのが実際です。「よい授業」とは何かを追い求め、子どもにとって価値のある学びができる授業をつくり上げていきたいと考えています。さらに、教師同士のよりよい関係性の構築も重要だと考えています。よい関係であればあるほど、協働が生まれ、仕事へのやる気は上がり、雰囲気もよくなるはずです。自分だけの殻に閉じこもるのではなく、対話を重視しながら関係を築き、学年運営や学校運営、研究の推進などに貢献していきたいと考えています。

私は現在、福井大学教育学部附属義務教育学校に勤務しています。本校では文部科学省の研究開発校の指定を受け、「社会創生プロジェクト」という新領域の研究を進めています。その領域では、総合的な学習と、国語科の「話す・聞く」「書く」領域を中心に、各教科とも横断的に学びを進めています。そして、9ヵ年をかけてよりよく生き、社会の一形成者として他者と協働しながら、社会に提言し、かつ社会に貢献しようとする資質・能力を備えた子供たちを育成しようとしています。私の担任している4年生の子供たちは、「幸せ」と「笑顔」について探究するために、地域の公民館で活動している方たちと関わり合い、一緒になって幸せをつくり上げようと活動に取り組んでいます。積極的に地域のコミュニティに関わろうとする子どもの姿や、自分たちにできることは何かを考え、様々なアプローチを探っていく姿などを見ることができています。1年間というロングスパンでの探究の中で、試行錯誤し、失敗し、成功し、様々な経験をしていきます。子どもにとって価値のある学びになるように、「社会創生プロジェクト」が目指す資質・能力が育まれるように、私は子どもたちの学びを支え続け、子どもと共に創り上げていきたいと考えています。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

新しい職場

学校改革マネジメントコース2年/大野高等学校定時制
上中 一司

1 大学院で学んだこと

学校改革マネジメントコース2年の上中です。昨年度は福井県教育総合研究所に勤務していましたが、本年度より大野高校定時制に赴任し教頭を務めています。昨年は、54歳にして大学院の門をたたきまし

た。大学院での学びは、新しい発見の連続でした。その学びは、新しい知識だけでなく自分の内面に向けてのものもありました。カンファレンス等で自分の教員生活を振り返った時、自分の教育で大切にしていたものは、「認める」というキーワードだと再確認

できました。一方、新しい発見の中で、最も印象に残っているフレーズは、管理職をされている先生が仰っていた「対話」というフレーズです。教頭は職員室の先生として教職員と方針等でディスカッションすることや悩みを聞く機会があります。それらを解決していくのは、「対話」しかない多くの管理職の先生が仰っていたのが印象的でした。

2 新しい職場について

現在勤務している学校の紹介をします。大野高校定時制の教職員は、校長教頭各1名、教員8名の他に講師、SC、SSW、通級指導員から構成されています。生徒は全学年合わせて48名で、1年生19名、2年生12名、3年生11名、4年生6名となっています。昼間部・単位制（4年制）で2学期制の学校となっています。午前中で授業は終わりますが、午後に組まれている単位を修得すれば3年での卒業も可能となっています。本年度より、入学者が20名近くとなり多くなってきました。これは、全県的な傾向と一致しています。生徒は、中学時代引きこもりの生徒もおり、多くの生徒が何らかの背景を持っています。先日、令和4年度のスクールミッション【使命】を、県に提出しました。スクールミッションは、『本校は、奥越で唯一の定時制高校で、近年は多様な学習ニーズに対応する学校としての意義が強まっている。本校の卒業生は、地元に住居しかつ就労することが多

く、地域社会を担う市民としての活躍が期待されている。そのため、「自立した社会人としての力を身につける」ことを目標に教育活動を進めていく』です。この使命を達成するため、多くの教職員が関わりながら、生徒を見取り支援していくことが、この学校の使命だと考えています。

3 この学校で印象的だったこと

この学校に来て、印象的だったことは2つあります。1つは、生徒理解協議会で、教員とSC、SSW、通級指導員等が、生徒について意見を述べていたことです。様々な目で捉えた生徒の情報を交換することにより、生徒の共通理解を図れます。今まで学校で勤務している時は、SCやSSWを見たことがありませんでした。しかし、この学校ではSCやSSWからのアドバイスを受けて教員が生徒を見取ることができる素晴らしい体制がある学校だとわかりました。2つ目は、ある1年生の保護者が「中学校の時に、不登校だった娘が毎朝登校することが嬉しい」と仰ってくださったことです。学校は、生徒の想いだけでなく、保護者の方々の想いを受け止める場所であることを再確認しました。

新しい職場で、教頭として、生徒、保護者、教職員の想いを受けて、それぞれと「対話」を続けながら「認め」、「自立した社会人としての力を身につける」教育を実践していきたいと思います。

“対話”のもつ力を信じて

ミドルリーダー養成コース2年/奈良女子大学附属幼稚園

鎌内 菜穂

幼児教育に身をおいて今年で18年目になる。「なってしまった」という感覚が私には一番合っている。職員の入れ替わりがほとんどないため、私の園での立ち位置は、常勤教員の中で長らく下から2番目だった。これまで好きなように実践を積み重ねさせてもらった。そして、研究や運営などいろいろな仕事を他の先生と一緒にさせてもらう中で、思うことを思

うまに話し、担当になった仕事をする、そんな風に過ごしてきた。

それが今年度から大きく変わった。新卒の先生と学年を担当することになり、学年主任になった。そして、指導部部長となり特別支援コーディネーターを兼任することになった。研究部にも関わらせてもらっている。立ち位置が変わることで、見えるものがこ

んなにも変わるものかと、その変化に右往左往する毎日だ。どうしてみんなこんなに忙しいのか。こんなに一生懸命働いているのに、同じところをぐるぐると回っているような気がする。職員みんなで「語る」機会をもち、それを省察につなげていくことを目指すために、昨年度から日々の対話＝“D.D. (daily dialog)”を始めた。園では、次第に「語る身体」を体得しつつある。でもまだその価値をみんなが感じるまでには至らず、「することが増えた」という感覚をもっていることも否めない。

本園は 110 年の歴史ある園だ。自覚をしないままに「伝統」として私の身体にも沁みついた園文化がある。語らずとも受け継がれてきたものがある。そうであると自覚もなしに、感覚的に動いてきた。その自覚を促してくれたのは、昨年度他園から来た先生の存在だった。私が感じているものが、その先生には見えない・分からないということがあることを知った。そして今年、新卒の先生と学年をもつことでもっと鮮明にそのことを自覚せざるを得ない。私は多くのことを「見て学ぶ」文化の中で得てきた。毎日巡ってくる実践と、実践を取り巻く山のような仕事を前に、そんな学び方では立ち行かない。何から考え手をつけていけばいいのか、今はまだ迷子だ。

思い返せば 4 年ほど前、保育実践において見える景色が変わった気がした。誰かの真似事の保育ではなく、「私が保育をしている」という感覚をようやく味わえるようになった。その変容の道筋を自分の言葉で語りたいという思いで、大学院への進学を決めた。私は何か変わったのだろうか。自分を見つめれば見つめるほど、自分の何を見ればいいのか分らず、教職大学院での 1 年目半ば頃には途方に暮れてしまっていたこともあった。出口のない迷路に迷い込んだような気持ちだった。しかし他者を通して、その関係性の中で、自分の思いを感じる事が変わっていることに気付いた時、それが私の変容であることをようやく感じ始めた。その学びは、様々な“対話”によって得られたものだ。

大学院で“対話”がもつ力を知った。そこに向かう自分の心もちを感じるようになった。自分自身だけを見つめるのではなく、他者を通して自分を知って

いく感覚を得るようになった。自分だけでは見出せない新たな意味を創り出す面白さを感じるようになった。様々なことを“伝達型”ではなく“対話型”にのせていくことで、多くの新たな意味を見出せる可能性を感じるようになった。その感覚は実践において、私が見ている「景色」を確実に変えている。

3 月、卒園間近のことだった。ある一人の子どもが「僕たちはそもそもどうして毎日幼稚園に通ったんだろう」とつぶやいた。これまでの私なら、その問いに「たくさんのことを学んだのよ」と私のもつ価値を与えようとしたはずだ。しかし、どうしても子どもの言葉で聞きたいと思った。だから悩む子ども達を前に、「何か変わったなと思うことはある？」と問い直した。すると少しして、「あ！僕たちルールを守るようになった」と一人の子どもが言った。それを聞き、「ほんまやな。私ら最初ぐちゃぐちゃやったよな」と笑って話す子どもがいた。そして「だから友達と仲良く遊べるようになったよね」「そうか。だから小学校に行って新しい友達がつくれるんや」「だから卒園するんだね」と自分達の変容を、遊び方や関係性の変容から感じ、そして卒園することの意味を自分達で見出した。まさに自分達の経験をくぐった言葉で、自分達にとっての意味を見出した瞬間だった。それは私の 1 年間の実践の意味を見出した瞬間でもあった。

そして 4 月、初めて家庭ではない「幼稚園」という「場」に出会う 3 歳児と向き合う日々が始まった。「幼稚園」という環境の中で、身の回りのモノにそっと手を伸ばしモノとの“対話”を通して、自分の「遊び」を創り出そうとする子どもの姿が目の前にある。少しずつ「幼稚園」を得ていく子ども達の姿に毎日ワクワクする。

実践を取り巻く全てのことに、このワクワクした気持ちを持てたらどんな景色を見ることができるだろうか。その道筋はまだ見えていない。でも、「実践をよりよいものにしたい」と思う園の先生たちと共に“対話”の在り方をじっくりと味わい、他者の存在を通して新たなものを生み出していくそのプロセスを楽しんでいきたい。「新しい景色」はその先に必ず見えてくる。そう信じて今年もあゆみを進めていきたい。

「主体的に学ぶ」おもしろさを実感中！

学校改革マネジメントコース2年／羽島市立中央中学校

熊崎 敦子

「実は今、大学院生です。まさかこの歳になってまた大学で学ぶとは思っていませんでした。そこまで勉強が好きだったわけではないですが、今、学ぶことが楽しいなと思っています。自分の考えを話したり、いろいろな考え方を知ったりすることで、自分の視野が広がり、自分が広がったとを感じるからです。何より自分に学びたい気持ちがあるからだと思います。こんな気持ちは何歳になっても感じられる人は、きっと生涯、元気で幸せだろうなと思います。そしてそう思える皆さんになってほしいと思います。最後の1年、一緒に勉強を頑張りましょうね」。

今年の中学3年生に向けて、教科開きで最初に話した内容です。教職大学院に入学したときは、このようなことを生徒に話すなんて想像もできませんでした。1年前にはそんな余裕も自信もなかったのだと思います。今は「学んだことを伝えたい」という気持ちがあります。1年の成長を感じます。

1年前の4月のカンファレンスでは、いきなり現れた「ラーニングコンパス」という言葉に「何だ、それは？」となり、「知らないのは私だけ？」という不安に陥りながら、初見の言葉や難しい単語の意味を調べて資料を読んだことを覚えています。初めてお会いした先生方と内容を交流していくうちに、いろいろな捉え方や解釈を聞き、自分の捉えはよかったかもしれないとか、そういう捉え方もあるのかということに気づき、少し安心しました。知らないなりに自分の頭で必死に考えたことを人に伝えることで、「なんとなく」だった言葉が「こういうことなのか！」というところまで深まっていきました。資料を読んで議論したことで、これからの教育の目指すところの理由、その根拠となるものがそこにあり、さまざまな教育改革につながっていることを理解し、その後の私の指導にも少しずつ変化をもたらしました。

「予測不可能な未来を生きる子どもたち」「他者とのかわりの中で」「主体的に」「問題を解決していくとする姿勢・能力」「well-being」こういったキ

ーワードが、日常の生徒を前に自然と浮かんでくるようになったのです。「目指す姿」「その理由」「価値」が私の中ではっきりしました。

教職大学院で大切にされている繰り返しの「省察」によって、自分だけでは気づけなかった実践の意味や価値に気づき再構築することで学びが深くなること、上手くいけないときや壁にぶつかったときの方が得るものが大きい、おもしろいということを実感することができるようになりました。

毎回のカンファレンスの前は何を話そうかと悩みますが、話した後はすっきりとして新しい視点をもった新鮮な脳に生まれ変わります。そして、また次の日から始まる実践への勇気と挑戦するエネルギーをもらえます。

今年の取り組みたいテーマの1つに「対話する教師集団、その『場』をつくる」というものがあります。多忙な中で同僚となかなか対話する場がないこと、いつかのカンファレンスで「生徒に『主体的、対話的で深い学び』を求めていくなら、まずは教師から！」という考えを聞いて、その通りだと思ったことがきっかけです。さっそく一度取り組んでみたことがあるのですが、やはり思うようにはいかないものです。でも次に向けて「最初にねらいを明確にし、共有すること」「時間を区切ること(適度な時間)」「対話するメンバー構成の工夫」等、改善してまたチャレンジしたいと思います。この実践について次のカンファレンスで先生方と交流し、省察できることがとても楽しみです。

いよいよ締めくくりの2年目、1年の自身の成長を実感しつつ、文章で表現するところは成長を感じていません。2月の長期実践研究報告書のことを考えると目途が立っておらず不安は尽きません。それに負けずに今年も多くの同志と共に実践を重ね、議論し合い、省察を繰り返しながら学ぶ楽しさを大切に味わいたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

「ミドルリーダー」とは

ミドルリーダー養成コース 2年 / 金沢高等学校
村上 孝有

教職大学院での学びも2年目となった。振り返ると、月に1回のカンファレンスや集中講座を経て、自分の視野が広がり、教育に対しての考え方が大きく変わったように感じる。大学を卒業し、金沢高校に採用されて10数年、私立高校のため転勤もなく、同じ環境で教育に携わっていた。自分なりに学び、同僚と意見を交わすことで自身の授業やクラス運営を改善していたが、どこか行き詰まりのようなものを感じていた。自分のなりたい教師像や、提供したい教育活動に明確な答えのようなものを持てずにいたのである。

ちょうどそんなときに、とある縁から教職大学院に入学することとなった。教員になってから、教育に関する話は高校の教員としかしてこなかったが、カンファレンスを通じて幼稚園、小学校、中学校の先生方と話をし、自分が受けてきた教育を振り返ったり、現在、高等学校に何が求められているかを考え直したりすることができた。また、特別支援学校の先生とのカンファレンスでは「教育」とは何か？という根本的な問いを見つめなおすことができた。「これがしたい！」「こんなことを学びたい！」という明確な意思を持って教職大学院に進学したわけでは無いが、1年目の終盤には自分のしたい教育活動、なりたい教師像が少しずつ見えてきた。

昨年度学んだことを踏まえ、今年度取り組みたいことが2つある。1つ目は、校内探究である。「金沢高校『らしさ』の追求」というテーマで、校内でチームを組み、探究活動を行うこととなった。（1）金沢高校の歴史について学び、伝統や本質について一定の共通認識をもつ（2）（1）を踏まえ、スクー

ルミッション・ポリシーについて学ぶ（3）（1）（2）を踏まえた上で、金沢高校「らしい」具体的な取り組みを提案する。何でも言い合える、信頼できる同僚とのカンファレンスは、まさに「主体的・対話的で深い学び」になっていると自信を持って言える。福井大学の先生方からもアドバイスを受け、このコミュニティを継続、発展させていきたい。

2つ目は「対話」が生まれやすい環境づくりである。私も今年で14年目となり、若手ではないがベテランでもない立ち位置となった。部署主任や学年主任を経験したわけではないため、昨年までは「自分は自分に与えられた業務としっかり向き合えば良い」と考えていた。しかし、カンファレンスで対話の重要性を感じてからは、どうすれば対話が起こりやすい環境になるのかを考え、行動するようになった。

入学前は「ミドルリーダーって、なんだろう？」とイメージすらついていなかったが、今は若手でもベテランでもない、自分の立場だからこそできることがある、と考えるようになった。ミドルリーダーとは何か、まだ言語化はできていないが、少しずつイメージが膨らんできている。もちろん、長期実践報告を作成することへの不安は常にある。先輩方の報告のようにまとめきれなのか、どこまで書いてもよいものなのか、業務と両立できるのかなど、挙げればきりが無い。同時に、この一年で何を学び、どのように生徒や学校に還元できるのか、ワクワクしている自分もいる。ある意味、昨年以上に期待と不安が入り混じった状態ではあるが、教職大学院の先生方の力を借りながら、自分なりのペースで、少しずつ、確実に成長していきたい。

金曜カンファレンス/インターン報告

福井と岐阜ハイブリッド型の週間カンファレンスでの学び

授業研究・教職専門性開発コース 2年/岐阜聖徳学園大学附属中学校
市川 海斗

私は今、福井大学教職大学院に所属しながら、岐阜聖徳学園大学附属中学校でのインターンを学びの中心としている。連合教職大学院だからこその学びの形であるが、私達は岐阜から初めてのストレートマスターであったため、岐阜独自の学びをどう築き上げるのか、連合を生かすために福井との連携をどう取るのか、昨年度はひたすら岐阜のストレートマスター4人で週間カンファレンスのあり方について考え、実践をしてきた。昨年度1年間の経験を得て、今年度は岐阜の形、福井との連携をしっかりと定め、週間カンファレンスを運営している。昨年度の試行錯誤から学んだこと、今年度の週間カンファレンスで実現したい学びについて書いていく。

大学院1年目の週間カンファレンスは、毎週岐阜のメンバーだけで行うところから始まった。週間カンファレンスを企画してくれる先輩がいない中、インターンでどんなことがあったのか、それについてどう思うのか、今思い返せば、悩み相談をし合うような状態になっていたが、このスタートが後の「話す」カンファレンスの軸となった。岐阜のメンバーだけで週間カンファレンスを進めながら、月1回月間カンファレンスをオンラインで福井と行っていくうちに、岐阜と福井の教育文化の違いを感じ、福井との交流がもっと必要なのではという声が岐阜のメンバーから出てきた。そこで、福井のストレートマスターと話し合い、岐阜のメンバーが福井の金曜カンファレンスに隔週で参加することが決まった。福井のM2との交流により、カンファレンスの運営について学び、福井の院生の意見を聞くことで刺激のある学びができた。しかし、岐阜は岐阜でやりたいこと、福井には福井の方針があり、どちらにも対応していくうちに、どっちつかずの状態になってしまい、この体制で終

わった昨年度の週間カンファレンスは、多くの学びがあったが、何かをやり遂げた達成感は得られなかった。

この学びを活かし、今年度は岐阜で週間カンファレンスを行い、月に1回福井の金曜カンファレンスに参加する体制をとることにした。岐阜で探り探りカンファレンスをやっていくうちに気づいた言語化することの大切さ、福井との交流で学んだ語り合うことの意味を取り入れ、岐阜でのカンファレンスは「話す」カンファレンスを運営していくことにした。岐阜の木曜カンファレンスは3つの時間で成り立っている。1「研究の共有」2「インターンの振り返り」3「本の輪読」である。全ての時間に作業の時間はなく、発表、議論の時間となっている。1「研究の共有」では、各学生がそれぞれのゼミで進めている研究についての交流をする。昨年度長期インターンを経験して、院生それぞれが自身の教科の専門性の低さに気づいた。そこで、インターン、週間カンファレンスとは別に各教科のゼミに参加し、自身の実践のための研究を進めることを決めた。ゼミでは教科に偏って学びを深めていくが、それを週間カンファレンスに持ち込み様々な視点で議論することにより、自身の研究について見直すことができる。2「インターンの振り返り」は福井の金曜カンファレンスの1の時間に当たる学びである。発表前にレジュメ作成をし、インターンで考えたことについて共有をし、議論をする。3「本の輪読」では、ストレートマスターで1冊本を決め、担当部分について毎回プレゼンテーションを作成し、発表をしている。岐阜でのカンファレンスを基本とするメリットは議論が深まりやすくなることである。毎回同じストレートマスター5人で進めていくため、それぞれが進めている研究、実践につ

いて全員が把握している。その中で議論をしていくため、議論の質が高まっていく。インターンについても、岐阜聖徳学園附属小中学校にそれぞれが属しているため、学校の特色を理解しておりそれぞれが考えていることについて深く共感することができ、共に同じ立場で考えることができる。しかし、連合教職大学院の良さを生かすためには、岐阜だけの視点に固まってはいけないと考え、月に1度福井の金曜カンファレンスに参加することに決めた。福井から学ぶということはもちろんであるが、岐阜のカンファレンスをより充実させることにより、福井のストリートマスターにも学びとなる刺激のある交流にして

いきたい。

このように、今年度は岐阜と福井で週間カンファレンスを進めていく。まだ始まったばかりであるが、昨年度と異なり、自分達がカンファレンスで実現したい学び、福井と交流をする意味がはっきりしているため、充実した週間カンファレンスを運営できている。「話す」カンファレンスを実現するために、毎週のゼミ、インターンでは常に学びの姿勢をもち、それらを記録にとりカンファレンスまでにまとめていく、カンファレンスを充実させることによって月1回の福井との交流を互いに刺激あるものにする。そんな学びのサイクルを実現していきたい。

「視野を広げる」「支える」(インターン・カンファレンスより)

授業研究・教職専門性開発コース 2年/丸岡高等学校
東 哲平

大学院での学びと丸岡高校でのインターンも気づけば2年目となっていた。昨年の2学期から引き続き、非常勤講師も兼ねることとなり、2つの高校を行き来しながら実践経験を積むことができている。そのような少々慌ただしい日々を送る中でふと思ったことがある。丸岡高校の1年生を見て、新しく変わった制服に、どこことなく新鮮さと若干の違和感を抱いた時、「自分も気づけば丸岡高校の一員になれているということなのか」と思えた。昨年の今頃は、インターン生の立場に悩み、どこか外部の人間のような、疎外感のようなものを勝手に感じていた。

しかし、生徒や先生方と1年間共に過ごしてきたことで大学院生という外から丸岡高校をみるだけでなく、中から丸岡高校をみることもできているように感じる。授業という生徒からすれば先生の当たり前のような姿も、授業後に先生方にしつこいくらいに話を聞きにいくと、授業のねらいや自分が気づけなかった生徒の様子や躰き、教材の工夫など様々な先生方の授業への取り組みについて学ぶことができている。

また、それだけでなく、校務分掌や会議など、生徒をバックで支える先生方の姿も見つ、経験し勉強させて頂いている。徐々に先生方から色々と話をし下さる機会も増え、授業観察や私一人の実践にとどまらず、チーム・ティーチングのような立ち位置で授業にかかわる機会も増えてきた。ある時、昨年入っていたクラスの生徒から「今年は〇〇組(昨年と同じ組)じゃないんですか?ええ…」という声をかけられた。すると今年入ったクラスの生徒から「今年は□□組ですよー!」と言われた。その二人は元々昨年中心的に入っていた学級の生徒である。それ以外にも、休み時間などでも昨年入ることの多かったクラスの生徒や授業をしたことのあるクラスの生徒からも話しかけてくれることも増えてきて、直近では、「ここが分からないので教えてください」と、放課後に勉強を聞きに来る意欲的な姿も見ることができ、嬉しかった。

ただ、生徒との関係性を築いていくことも大切だが、「生徒をどう支えるか」という疑問をふと考えるようになった。些細な一場面であるが、先日地理の授

業を参観させてもらった時に、学習に躓いている生徒にどう働きかけようか、考えることになった。「時差の計算」で問題演習をしていた際、解き方もそうだが、時間の考え方について少し混乱している生徒がいた。学習塾でアルバイトをしていた経験もあったため、解説する分には時間をかけてできないわけではないが、生徒が自力で考えていけるように、ヒントの種をまいて気づかせるようなアプローチをした方が良いのではとも感じた。しかし、それならどのように声をかければよいのか。私自身も小学校の時に算数が大の苦手だったため、その子の気持ちも何となくわかる部分もあった。ただ、その時は、近くの席の子が「答えはこれやん」と言いつつも、熱心に解き方や考えを教えており、間違っていなかったためそつと見守る形を取った。

この話を週間カンファレンスでした際、様々な角度から考えを聞くことができた。その回のグループメンバーは先生も含めて、数学専門や特別支援にかかわる人たちだったため、自分では思いつかなかった視点からその子への働きかけや題材についての話ができた。生徒の躓きの背景であったり、時間を数学的に見ると違和感のある単位・概念だという話であ

ったり、そこから自分だったらどのような授業をつくるか、当たり前のように設定されている教科書の内容に、一歩引いた視点から突っ込みを入れると導入や動機付けの点でヒントになることもあるということ学べた。教科横断の話に広がりもして、カンファレンスの時間があっという間に感じた。週間カンファレンスでは、社会科という一教科を例にとっても様々な専攻の人からの（視点からの）話も吸収できるし、改めて考え直すきっかけができることもある。このような環境はこの教職大学院の強みなのだとこのことを1年以上経験してきて改めて実感した。

1つのものごとを違う見方で捉え、「視野を広げられる」カンファレンスでの学び、また、長期的に生徒とかかわる中で教師として「どう支えられるか」ということを考えさせられる「インターンシップ」、それぞれがお互いに自分の中で学びとしてリンクしてきたように思う。この立場も活かして非常勤講師としても、教科担任という1年間の生徒とのかかわりを大切にしていきたい。大学院、インターン先、非常勤先と3つのコミュニティを行き来しながら、それぞれの架け橋的な存在として自分なりに実践し、存分に学んでいきたい。

協働の大切さ

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井大学教育学部附属特別支援学校
岩本 幸裕

私は現在、附属特別支援学校の中学部で週に3回インターンシップを行っている。個別学習に入ったり、ゆうゆうタイムや表現、運動などの授業にも参加したりしている。授業には参観者としてではなく、サポートのような形で、子どもたちと関わりながら参加している。昨年からインターンシップを行ってきた、今年で2年目になるが、子どもたちからもたくさん話しかけてくれることが増え、また、先生方とも話す機会が増えてきた。私は大学院のインターンシップということで、学校で実習させていただいている立場ではあるが、メンターの先生は個別学習の話で

あったり、授業の話であったり「先生ならどうやって進めていく？」と聞いてくださることが多い。授業の参観者として見ているだけではなく、実践を協働して作っていく教員のような形で関わってくださることに感謝している。

現在、インターンシップでは新しく中学部に入ってきた1年生の子どもの言葉の学習に、メンターの先生の作った教材を参考にしながら取り組んでいる。私自身も、どのような教材でどういった学習方法をとることがよいのかを考えながら、個別学習に参加している。イラストと文字、音声をうまく結び付けら

れるように、言葉の発達についての論文を参考にしながら教材を考えている状態である。今後も、子どもの様子を見ながら「自分がもしこの子の担任だったらどのように学習を進めていくのか」を考えながら取り組んでいきたい。また、昨年も行ってきた、発達段階の高い生徒たちの探究的な活動をどのように作っていくのか、どういった実践をしていくかも現在考えている。メンターの先生やクラスの先生とも相談しながら、今年行う授業実践についても考えていきたいと思う。

インターンシップ以外に、大学院の金曜カンファレンスでは、今年からM2として運営に携わっていくことになった。今までは先輩の作ってきたカンファレンスに沿って学んでいったが、今年は自分たちでどのような学びを作っていくかを考えていかなければならない。金曜カンファレンスのカリキュラムを

考えていくことは、今後、教員になっても役に立つと考えられるため、他の院生や大学の先生とも協働しながら作っていききたい。

まとめてみるとインターンシップも金曜カンファレンスも協働が重要なポイントであると思う。インターンシップでもメンターの先生や中学部の先生方と話をしながら授業や個別学習を作っていくことがよりよい子どもの学びを作っていくことになる。金曜カンファレンスも院生や大学の先生方と協働していくことで、より良いカンファレンスのデザインが作られていくと思う。自分1人で考えるだけではなく、自分の考えを他者と語り合ったり、他者の考えを聞いたりしていくことが、教員としての資質能力を高めていくことにもつながると考えて、今後も学び続けていきたいと思う。

4 月合同カンファレンス報告

「語り合い」のその先に

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程
河野 茅乃

大学院の2年目となり迎える最初の合同カンファレンス。「語り合う」ことがいかに重要で魅力的なものであるかを再確認できた2日間であった。

年齢や経験、学校内での立場や本質を同じにしながらも見解が違う先生方が1つのグループになり、じっくりと語り合う。まだ現場経験の浅い私達ストレートマスターの話にも耳を傾け、一つひとつ頷きながら話を聞いて下さり、私達と同じ目線になって意見を交えて下さる現職の先生方はとても温かく、先生方と語り合いができていたことが嬉しかった。また、同じ資料を読んでも当たり前のことであるが、

読み手によって捉え方や考えることは違う。だからこそ、協働で物事を成し遂げたり、語り合いによって同僚性を高めたりすることが重要であることに気づかされた。Cycle2 で検討した「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学び」にも、個別最適な学び、協働的な学びを通じて「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、児童生徒等の学びのみならず、教師の学びにも求められていることと書かれてあった。

このように、今求められている学びを児童に実現させる前に、まずは教師自身が経験し、その学びから

得られる良さを体感することが大切なのではないか。私自身が傾きながら話を聞いて下さることに喜びと安心を感じられた様に、教師目線ではなく児童の目線になって学びを経験できる場が教職大学院のカンファレンスであると感じた。ふと、授業での自分の姿を頭に浮かべた。「〇〇さんの話をしっかり聞きましょう」と言っている自分がしっかり聞けているのであろうか。進行にばかり気を取られ、経験のなさで浮足立っていた自分は、どれだけ児童の目線になっていただろうか。些細な発言や言葉なき思い、児童の内面にも傾聴できていたか。このカンファレンスでの学びのスタイルを授業実践でも活かしていきたい。

長期実践研究報告を読み、専門職としての実践と学びプロセスを探る時間には、昨年度修了された同じコースの蟻塚知都さんの「手で考えることによる自己の変容」を検討した。蟻塚さんの専門である「美術」を思う存分追求し、素材に対し向き合ったという事実だけではなく、蟻塚さんという“人”の魅力が詰まった内容であった。それは良い部分だけではなく、葛藤や不安、失敗といった他人には隠したいような

部分も含めて書かれているからである。私も、自分とはどういう人間なのかといった全てを読み手に分かってもらえるような長期実践報告書を執筆したいと思った。そのためにこの1年間はさらに見聞を広め、経験値を高めていきたい。

ここで話を「語り合い」に戻すが、蟻塚さんの長期には「思考は表現された作品として知覚できるようになって初めて自己の中に定着される」と書かれてあった。美術の場合は作品であるが、このことは授業中の発表や、振り返りなどでも同じ事が言えるのではないだろうか。教師が評価するためにそれらを児童にさせるのではなく、ここでも児童の目線に立ち、思考が自己の中に着実に定着できるように、最後に振り返ったときにその思考の変化を捉えられるように、教師は授業を作っていく必要があるのだと学んだ。

カンファレンスの場は、本音で語り合うことでそれが学び合いに変わる。今後も、現職の先生方の飽く無き学びの姿勢に刺激をいただける月間カンファレンスを大事にしていきたい。

4月合同カンファレンスを振り返って

学校改革マネジメントコース M2/戸田市立戸田中学校
藤田 政貴

この2日間のカンファレンスに取り組んだ自分の心と頭の状態を一言で表すとすれば、それは「1年前の答え合わせをしている気分」であった。

20年以上の教職人生を経て、「これから」に漠然とした不安を抱えていた2年前。不安を取り払うために新たな学びの場を求めて福井大学連合教職大学院のドアをたたいた1年前。学びの初日は何をすればよいのか、何を話せばよいのか分からず、先輩方や同級生を真似るのが精一杯だった。望んで入学したものの、その日は多くの学びにパンクしそうな頭を抱え、途方に暮れながら帰路に着いたことを覚えている。

それから1年経った。カンファレンスでの様々な経験や背景を持っておられる新しい仲間たちとの交流は刺激的であった。また、修了された先輩方は報告書作成という大仕事を成し遂げた自信と余裕をもって我々在校生の活動を見守ってくれていた。何より、東京サテライトのコミュニティが成長してきたのだという実感と、コミュニティに自分がいるという嬉しさがあった。

「3つの種」では、昨年度の学びを新たに書き加えた。ようやくその面白さと奥深さを感じ始めた省察、言葉を磨き上げること、価値付け、俯瞰から物事を捉えること、つながる・つなげること、ファシリテーシ

ョン、自分が志向する分散型コミュニティなどである。また、今年度から職場・職位が変わったことによる目標の見直し（概ね変更はないが）をこれからの自分の課題に挙げた。セッションでは、すでに個人的にコミュニティを築きつつある方の細やかな工夫や配慮について聞くことができた。また、何もかもご自身でできてしまうがゆえに、コミュニティを形成する機会を失ってしまっていた方のお話も興味深いものだった。お二方の説明を、自分の過去の取組と重ね合わせながら聞くことができた。

この1年の学びで心がけるようになったことがある。それは「あえて自分の専門分野から離れることで、新たな学びを得る」ということである。そこで、先輩方の長期実践研究報告書の読み込みについても、この考え方に沿って自分から遠い分野で学んだ方の報告書を読んだ。自分は中学校教員だが、今回は保育園教諭の報告書を読んだ。「一見自分と関連がなさそうな文献を読んで、自分の思考と紐づけすること」をずいぶん意識的にできるようになった。特に、学びのスタートラインに立つ時期の子供たちへの遊びを通した学びの提供については人間教育の原点を感じるものであったし、インクルーシブ教育の視点に立った（幼児）教育の考え方は小学校以上の学校種でも重要であることを改めて認識した。知っている分野を深掘りするのも楽しいが、未体験の分野に飛び込んでいくのも楽しいものである。

今後の展望についての協議については、グループメンバーが全員管理職経験者であったこともあり、

人を育てることが学校改革につながるという認識は一致していると感じた。また、人を育てる上で「待つこと」が重要であると同時に、待つことが非常に難しいことであることも理解できた。何よりも人を育てるため、学校を育てるためにコミュニティを構築することにチャレンジしなければならないことを意識できた。自分の今後は未定の部分が多いが、「今の職場の強みは『人』、弱みも『人』」を意識したマネジメントに取り組みたいと考えている。

これも昨年度の経験のおかげだと思うが、今回は仲間の説明を一層「自分ゴト」として捉えられるようになったように感じた。むしろ、自分の体験と結びつけながら説明を聞くことを相当楽しめるようになってきた。これまでの「自分の説明で精一杯」の状態から成長したのだろうか。また、人に話すこと（アウトプット）によって思考が整理され、自分の取組が価値付けされることは本当にありがたいことで、かつて求めていた学びの場にやっとリーチできるようになったと感じている。もちろん、まだまだ…と感じているものもある。セッション中の言葉のチョイス、話し方、声のトーンなど、自分が持つイメージを伝えること・表現することの難しさは相変わらず感じている。しかし、仲間と分かち合うための必要なプロセスとして、あえて楽しむくらいの気持ちでいたい。仲間は一生懸命理解しようとしてくれているので、胸を借りるつもりで自分を表現していきたい。

この2日間、それぞれのサイクルの意図を感じながら諸活動に取り組めたと自画自賛している。1年かけてカンファレンスの価値をつかみ取れたのかも知れない。これからもっとたくさんの価値を得ていきたいと強く思う。

今回は、心地よい疲れを感じながら帰路に着いた。

4月月間カンファレンスを終えて ～対話の重要性を再確認～

ミドルリーダー養成コース M2/岐阜聖徳学園大学附属小学校
山崎 優

2年目の教職大学院がスタートしました。昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンラインでの参加が多かったですが、4月の月間カンファレンスでは福井大学に赴き充実した2日間を過ごすことができました。福井へ向かう車内で、どのような自己紹介をしようか考え、昨年度の教職大学院1年目を思い返していました。1年前の自分は「何を研究したいのだろう」「何を学べば良いのだろう」と不安な気持ちでいっぱいだったことを思い出しました。それから月間カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座を通して多くの先生方と出会い、語り合うことで少しずつ自分の方向性が見えてきた1年間だったことも同時に気がつきました。そんなことを考えながらの福井までの2時間でした。

この2日間で痛感したこと。それは「対話の重要性」です。限られた時間でしたが、あっという間に時間が過ぎました。きっとそれは先生方との語り合いがとても充実していたからだと思います。思えば、新型コロナウイルス感染症の拡大によって子どもたちも学校での活動に多くの制限がかけられ、グループでの学習や対話もできない状況が続いていました。その制限も少しずつ緩和され、学校での教育活動も感染対策を行いながら少しずつグループでの学習ができるようになってきました。その子どもたちの様子を見ると、やはり仲間と「対話」することに喜びを感じ、充実感をもった表情をしているように感じます。私がこの2日間で感じたことと同じなのだと思います。

カンファレンスの冒頭、柳澤先生から「これからの学びの出発点」というお話を伺いました。常に多様な展開の中から学び続け、その状況の中から自分たち自身で問い、判断する力をつけることの重要性をお話しいただいたことが非常に印象に残りました。多種多様な先生方との語り合いはまさにその場に適しているのだと今回のカンファレンスで実感しました。

Cycle 1からCycle 4までを通して、たくさんの先生方と出会うことができ、またお互いの状況や考えを共有することで、自分の視野や考えの広がりを実感しました。Cycle 1では「3つの種」を基に自己紹介を行いました。それぞれの置かれている状況が違う中でも、先生方との対話から共通の悩みや課題があるのだと感じました。特に、高尾先生のお話が非常に印象に残りました。校種は違えども、子どもたちのため、職員のため、学校や園のためを思う気持ちは同じことに共感し、また少子化の中、どのように他校や他園との差別化を図るかということは私の勤務校にも当てはまることだと共感を覚えました。

「対話」をすること。当たり前に行っていたことが実はありがたいことなのだと実感した2日間であったと同時に、コロナ禍でも子どもたちの学びを途切れさせないように、我々教師が学び続けなければならないことも実感した2日間でした。この1年間でたくさんの先生方との「対話」を通して、自分自身のブラッシュアップにつなげたいと感じた2日間でした。関わっていただいた先生方ありがとうございました。また、今後ともよろしくお願いいたします。

2日間の学び

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校
川畑 優希

先日、今年度初めての月間カンファレンスが行われた。コロナ禍ということもあり、前年度はオンラインで参加することが多かったが、今回、久しぶりに対面で参加することができ、直接皆さんと会って話し合うことができた。4月の月間カンファレンスは年度初めということもあり、2日間にわたって行われた。1日目の午前は、「3つの種」をもとにグループで自己紹介をし合い、午後は教育改革の展開にかかわる資料を検討し、グループで話し合った。それから、2日目で検討する長期実践研究報告書を選択し読み進めた。2日目は、長期実践研究報告書を読んだ後、グループでそれぞれ読み進めたものについて話し合った。最後は、2日間の学びを振り返って終わった。この2日間で特に印象に残ったことをここに述べたいと思う。

1つ目は、教育改革の展開にかかわる資料を検討したことだ。資料を検討するにあたって、小林真由美先生から教育改革の展開を吟味することの意味についてお話を伺った。その中で『子どものかわり方が変われば、子どもが変わる。子どもが変われば、世の中が変わる。世の中が変われば、社会が変わる』。つまり、子どもたちを支える教員は社会に働きかける責任があるのだという話をお聞きした。また、教員は子どもたちの多様性に目を向けて新たな価値を見出して個性を伸ばしていくべきであり、それは教員にしかできないことであるということも学んだ。それを踏まえた上で、今回の教育改革の展開に関わる資料を読み進めた。私は、中央教育審議会の『「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて』を検討した。教員免許更新制や「令和の日本型学校教育」を担う教師の学びについて記されていた。主に後者を読み深めていくと、新たな教師の学びの姿や学び続ける教師について書かれていた。主体的な姿勢の尊重、学びの内容の多様性の重視、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の体

験」を重視したスタイルの学びの多様性の重視、新たな領域の専門性を身に付ける等、教師の学びの姿がたくさん挙げられていた。また、教師の学びの姿というものは子どもたちにとってのロールモデルであることも書かれていた。子どもたちに様々な力が求められているように、子どもたちを支える教師にも多くの力が求められている。「令和の日本型学校教育」の姿として、子どもたちの学びの中に個別最適な学びと協働的な学びが掲げられている。これは、教師にも共通するものであることを学んだ。個別最適な学びと協働的な学びを往還させていくことで、バランスがとれるということだった。これまで、この2つの学びは一見相反するものなのではないかという疑問を抱いたこともあったが、今回資料を読み進めていく中で理解することができた。資料検討後、グループで話し合いを行った際、教師にもとめられていることが多すぎるのではないかという意見もあった。資料に書かれていることの実現と働き方改革をどのように両立させていくかが今後の課題になっていくように思われる。

2つ目は、長期実践研究報告書（以下、長期とする）を読み進めたことだ。私は、家高里佳さんの『“物語る” 学びを続けていくこと一省察的实践者となる第一歩一』を検討した。家高さんの長期を選択した理由は、同じ福井市中藤小学校でインターンシップをされていて、自分が掲げている研究テーマに共通するものがあったからだ。

家高さんの長期で素晴らしいと思った点は、思ったことや考えたことをありのままの言葉で表現していた点や子どもとの何気ない会話から考察を深めている点、授業実践での反省をしっかりと振り返っている点である。まだまだ真似したいと思う点は挙げられるが、特にこの3点は印象に残った。昨年度長期を読んだときには、2年後、自分もこのようなものを作成するのか…という程度でしか理解できていなかった

たが、1年後の今はインターンシップや毎週、毎月のカンファレンスを経験して、子どもの見とり方やカンファレンスでの学びを共感しながら読み進めることができた。共感する部分も多い中、ある箇所では違和感を抱いた。それは、気がかりな子どもの要望に対して「…わがままを受け入れるべきではなかった。」と記されていたところだ。私はその場にいたわけではないので、詳しい状況や子どもの様子はわからないが、昨年度のインターンシップで自分自身同じような疑問を抱いたことがあった。これに関しては、対象

の子どもによっても対応が違ふし、関わる立場によっても関わり方は違ふだろう。さまざまな捉え方や考え方がある中で、どの対応が子どもにとって最善かを考えながら関わることの重要性を改めて感じた。

今回の月間カンファレンスを終えて、県外の院生や先生方と会ってお話することができて、改めて直接対話することの良さを感じた。それぞれの県や学校の特色を伺うこともでき、新たに視野が広がった。今年度も毎月のカンファレンスを有意義なものにしていきたい。

2年目スタート！ 気持ちも新たに「4月カンファレンス」

学校改革マネジメントコース M2/宮古島市立狩俣小学校
下地 美和子

大学院に入学して1年が経った。今年度は4月に初めて福井県に足を運び、本家本元の福井大学での開講式に参加させていただいた。それと同時にこれだけ多くの先生方、職員の皆様に関わってくださっていることを肌で感じ、改めて「私は院生なのだ」と身が引き締まる思いがした。そして、この大学院で学べること、その中にいてあと1年学べることを有難いと感じた。

そして4月30日・5月1日に行われた東京サテライトでの4月カンファレンス。新しいメンバーも加わり、また修了なさった3名の先生方も参加してくださり、2年目の院の学びがスタートした。

昨年度を振り返ってみると、この1年間は、「院での学び」というより「院の学び」に慣れるのに必死であった。始める前は、私の周囲に院で学ぶ人は1人もおらず、院の存在やシステムも知らなかった。右も左も分からず場違いなところに来たような感じがして、とても緊張していたことを思い出す。読むことも、まとめることも十分にできず、疲労困憊していた自分が懐かしい。それを考えるとちょっとは成長しているのかなと思える自分がいる。

今回の4月のカンファレンスでは、冒頭の柳澤先生の2つのお話がとても心に残った。

1つ目、『非常に大きな長い方向感覚を持ち続けること。国の1国の在り方、大きな展望の中で発展させていく。長い展望、大きな展望をもっていけないといけない。そのアプローチは多く、多様なものがある。多様な展開から学び等を深めていく』と話された。これからの教育の在り方、教員としての歩み方を示してくださったことがとても印象に残りありがたかった。

「広い視野と大きな長い展望」～私は、院に入学することで、それを学べるチャンスを得ている。いつも模索の中にいる自分であるが、院での学びを通し、自分の学校で模索しながら、教育の多様化の時代の中、多くの院の先生方と語り合いながら、大きく長くしなやかな方向感覚を模索し、身につけていけたらと改めて思った。

2つ目、『いろいろな展開をしながら、状況を見て取り組みながら、次の手を考えること。掴み取る。自分の判断力をつける。発展の芽はどこにあるのか、どこを展開させないといけないか、次の問いを持ち、発

展させていかなければならない。その力をどうやってつけていくか、学校の状況を探りながら、アプローチを探しながら行っていく。どういう壁にぶち当たるのか、アプローチを変えたり、変化させたりして、自分の判断力をつけていく。長期の展望、試行錯誤が力になる。担保になる。そういう意味でも、福井大学が大事にしているのがカンファレンスである。自分の実践の展開を大いに語る。どういう風にとらえるのか、聴く側も多様なものを学ぶことができる。実践の中での判断力を学べる良いチャンスである』と話された。

課題に対して解決策を講じながら、状況を見て、さらに次の手を考え準備をしていくこと。アプローチを変えたり、変化させたりして自分の判断力をつけること。自分の実践の展開を大いに語る場のカンファレンスを活用して、実践の中で判断力を学ぶよいチャンスとする。自分の課題解決のアプローチを増やすためにも、カンファレンスを活用し1年目の学びを消化ではなく蓄積として、主体的に学んで成長していきたいと思った。

今回のカンファレンスでは、研修の企画・運営・システムの在り方を考えさせられた。

実際に行政で研修を企画・運営していた前橋先生と、4月から宮古教育事務所に赴任なさった本村先生と、東京・地元の両方に関わってきた福島先生、私

とで教員研修の在り方について話し合う情報交換ができた。実際に東京都での研修の持ち方やあり方などを聞くと、企画や内容、実施方法などの大きな違いなどが分かってきた。資料を読み、他地区の情報を得て、現実を知る。それに伴い課題も浮上。ではどうすれば改善できるのか、地元の実態を活かして、どうすればより良い研修会を企画・運営できるか、そのために何をするのか、どうしていくのか。課題は山積、私も他人ごとではなく、本質は一緒。

資料の中で、『教師自身や学校、地域社会のウェルビーイングを目指して、学校全体で共有するプロセスが重要である。そのためには、対話を通じて担うべき役割の認識共有を図りつつ、主体性をもって学んでいく。教師も児童生徒も個別最適な学び、協働的な学びを通じて「主体的・対話的深い学び」の実現が求められている』ことを再確認した。

今年1年、4月カンファレンスのスタートに当たり、柳澤先生のおっしゃるように、大きな長い展望でとらえ、様々なアプローチをし、カンファレンス等で学んだことを活用しながら、実践の中で判断力を学んでいきたいと素直に思った。自分自身の現実を見ると果てしなく遠い気もするが、院の先生方、院生の皆様方の力をお借りして、この大学院で学ぶことに感謝しながら、一步一步、貴重な1年で少しでも成長していけたらと願う。

学ぶ楽しさを味わう 1 年に

ミドルリーダー養成コース M2/立教女学院中学校・高等学校 堀井 優

新年度を迎え、慌ただしくもあっという間に1か月が過ぎた。ようやく新しいクラスや学年に慣れてきたところで2年生最初のカンファレンスを迎えることとなった。新たにM1の先生方を迎え、どこか緊張感のある2日間だった。東京サテライトでは、はじめに福島先生から「この2日間は2年間の縮図だと思ってください」とお話があった。昨年の4月は全く余裕がなく、そんな風に考えることなど出来ずに、ただ目の前の課題に取り組むことに精一杯だ

った。しかし2年目の今回は少し落ち着いてCycleの流れを考え、その意味を自分なりに考えることが出来た気がする。小さなサイクルの繰り返しが教職大学院での2年間、そしてこれからの教員生活を形作って行くということを改めて感じ、大きなフレームで捉えることが出来たと思う。4月の月間合同カンファレンスでの大きな気づきは、小坂康之先生の長期実践報告の中にあった。「主体的に取り組ませる内容」や「教師の協働」の重要性を改めて考えることが

出来た。これまで私は生徒に主体的に取り組ませることを意識的に取り入れようと心掛けていたが、主体的に取り組ませる“内容”についてはどうだろうか？そこまで考えが及んでいなかったかもしれない。例えば、生徒が主体的に暗記に取り組み、それが成功体験となった場合、暗記する力は身につくかもしれないが、その生徒が育むべき力が身につかないこともある。また、成功することは達成感や大きな喜びを得られ、さらなる学びへの意欲が増すかもしれないが、育むべき力は身につかないこともあるのだ。ここでは、教師が“生徒の育むべき力”を見抜くこと、学びの方向性を軌道修正することが重要だと感じ、自分を振り返る機会をいただくことが出来た。さらには、生徒の学びを支える教師の協働もこれまで幾度となく重要性を見聞きしてきたが、小坂先生の長期実践からもやはりその重要性を感じた。教師の協働など、果てしなくゴールの遠い課題だと感じていた私にも、この1年で変化が起きた。入学当初の私は教職大学院で学ぶことを同僚には内緒にし、こっそり学ぼうとしていたのだが、1年が過ぎた今、同僚

に実践コミュニティが出来たのだ。今はまだ小さな実践コミュニティだが、生徒のため、学校のために語り合う時間はとてもワクワクするものである。今後このコミュニティをどのように発展させられるかも課題の一つであり、楽しみでもある。生徒を支えることはもちろん、自分自身が教師として成長し続けるためにも、協働できる仲間が必要であると改めて感じている。同様に大学院で共に学ぶ仲間も大切な存在である。月に1度のカンファレンスで自分の位置を確認し、次の展開の方向性を見出し、新たに「問い」を立て直す機会になると柳澤先生は仰っていたが、まさにその通りである。自分の実践を他者に話すことで頭の中が整理され、さらには悩みを相談したり、時には大きな「問い」をいただいたりすることもある。そしてまた頑張ろう！と勇気をもらい学校に戻ることが出来るのだ。2年生として、先に立ちほだかる長期実践報告執筆に不安を抱えつつも、仲間との学びの時間を楽しみながら、教師として一人の人間として成長できる1年にしたいと思う。

ラウンドテーブル 2022 Spring sessions 振り返り

ラウンドテーブル 2022 Summer sessions が近づいてきました。今回は、対面とオンラインのハイブリットでの開催を予定しています。ここで改めて、前回の 2022 Spring sessions の学びを振り返ってみましょう。

*役職、勤務校は、令和4年2月現在のものです。ご了承ください。

子どもと共に歩める私でありたい

信州大学教育学部附属松本中学校 鎌倉 琢磨

Zone A では「学校：21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う～多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る～」というテーマのもと、軽井沢風越学園や福井県立武生高等学校の実践が発表された。両者の発表に通底していた考えは、「探究的な学びを行っていくために、学習

の主体者である子どもをどう捉え、どう向き合い、どのように学びを支えていくか」といった点であった。私は、両者の実践を聞き、教師の在り様を問い直さざるを得ないと感じた。なぜなら、お二人が日々の子どもの営みを見つめ直すとともに、教師自身が「本当にこれでいいのか」と、教育の意味や教師の役割を問い

直し、変容し続けている姿がまじまじと伝わってきたからだ。私は、「目の前にいる子どもたちと真剣に向き合っているのか」「子どもの姿を捉えたつもりでいただけではないのか」といった、強い焦燥感に襲われ、自分の教育観を揺さぶられるような思いがした。実践発表をお聞きし、自分の教育観を見つめ直す指針として、特に私は、以下の3点について示唆をいただいたと思っている。

① 子どものよさや強みを全職員で肯定的に捉え、指導に活かす

子どもはそもそも多様であり、子どもがもっているよさや強みが違う。感じ方も違う。だからこそ、内在するよさや強みが、さらに伸びていくような支援をしていく必要がある。そのためには、子どもを肯定的に捉え、真摯に向き合うとともに、多くの職員の目で子どものよさや強みを語り合いながら、自分自身の教育観を日々、更新していくことが必要である。

② 期待や予感を抱く教材との出会い

教材が「自分の生活や生き方とどうつながるか」「その教材について学んでいくことで自分の生活や世界がどう変わっていくのか」といった、今後の学習への期待や予感を抱ける教材との出会いが重要であることを改めて実感した。その期待や予感が切実な

「思いや願い、問い」につながり、探究的な学びを行っていく際のエネルギーになるのではないか。

③ 教師自身が一人の探究者として、生徒と並び見しながら歩みを進める

教師が定めた目標に全員が到達するようにと、教師が導いたものに、子どもは探究的に学ぶ喜びを感じることはできない。生徒と共に、並び見しながら教材の本質や価値を共に分かち合っていくことで、「探究的な学び」が生まれてくる。教師自身も「一人の探究者」として、生徒と共に歩みを進めていく。その先に分かち合いたい場面、情景が生まれ、それが「探究的な学び」になっていくのではないか。

その後のブレイクアウトルームでは校種や県を越えて、多くの先生方と、シンポジウムの発表について議論を重ねた。そこで驚かされたのは、話をしている「心地がいい」「ワクワクする」ということだ。「『探究』とは何か」「生徒に内在するよさや強さとは何か」について、同じように悩み、実践されている仲間がいることに安心感や心強さを抱いたからだ。同時に、明日からの実践を行っていく活力もいただいた。先生方と語り合い、見えてきたことをもとに、子どもと向き合いながら実践を重ね、再びラウンドテーブルで語り合いたい。

自分の省察とこれからの歩む方向を見つける

岐阜県中津川市立山口小学校 石垣 治彦

福井大学教職大学院を出て2年が経つ。

福井大学教職大学院で学んだ後は、中津川市立山口小学校（岐阜県）の教頭職に就いている。忙しい日々を過ごしているが、学校行事がないときは、必ずラウンドテーブルで報告するよう心がけている。修了後、自分に課したこの課題は、教職大学院時代に支えてくださった先生方や共に学んだ方から、「お互いに教育現場での実践を語ることが、自己の実践をさらに高めてくれる」、「職員コミュニティ形成の重要性が学校の活性化につながる」ということを学んだからである。また、教職大学院を出て、広がった知見

を「子ども達や先生の授業改善に活かしているか」。自己のおごりが「職員指導や子どもの指導に出てしまっているのではないか」という不安もあった。そうした心配をなくすためにも、ラウンドテーブルで全国の方の実践を聞き、自己の実践を語ることは、自分の省察につながっていると感じている。

こうした中、今回 Zone A 学校「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う-多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る-」に参加して、先生方の実践を聞き、教職大学院を出てからの実践を語った。

はじめに、軽井沢風越学園の片岡利充教諭のご実践を聞かせて頂いたが、私が日々の忙しさに忘れてしまっていた「遊びの中で子どもは育つ」「子どもをみとる教師の目」「子ども達のコミュニティ形成」を再度学ばせていただいた。小さな子ども達でも、大人が考えつかないような発想で自分たちの課題を克服していることが印象的だった。

また、福井県立武生高等学校の室井浩貴教諭のご実践からは、高等学校での探究の実践を聞かせていただくことで、「小学校段階でどのような力を付けていくことがよいのか」「総合的な学習の時間（探究）を充実させることで、21世紀型の学びを高められる」ということを学んだ。社会で生き抜くために、自分の選択を広げる術や地域を担う自分たちという気概にあふれた人材育成であったと感じた。

また、お二人のご実践の後のクロスセッションでは、私が常に子どもと接する時に考えてきた「子どもを軸足に考える」ということをさらに深められたと感じている。

また、教頭職として、「子どもを軸足として考えること」「担任を軸足として考えること」「地域を軸足として考えること」といった視点が増えてきたが、今後21世紀型の学びを構築できる学校であるためには、やはり「子どもを軸足に考える」ことが大切であり、「子どもの発意」を促すために小学校段階でも「遊び」を大切にして、子どもの「なぜ？なに？」から始まる授業を目指したいと考えた。

今年度、偶然にも5年生の「総合的な学習の時間」を担当することができた。さっそく、山口地区まちづくり協議会会長に連絡をして、子ども達と一緒に米作りを行い、収穫した米で五平餅をつくり全校児童に五平餅をふるまった。また、五平餅作りで使用するタレは、子ども達が地域で収穫した落花生とくるみを利用して作った。



地域でくるみを収穫

子ども達に米作りの全てを任せることには不安があったが、子ども達が、自分たちの失敗から、たくさんを学び、子ども達自身が課題を克服するために、あえて米作りの方法を指導しないようにした。

予想通り子ども達は、いきなり田植えで失敗をした（苗を多く植えすぎた）。社会科で苗の分けつという知識は知っていたが…。地域の方から、「これでは、米はとれないよ」という電話が入り、すぐに、苗をみんなで植え直した。教師があらかじめ植える苗を指導すればこうした失敗は防ぐことはできる。しかし、「子どもの学びを奪ってしまうのではないか」という思いが私にあった。担任達からは、「教頭先生、苗どんなに植えとるの、そんなんじゃ米とれんよ」「はじめに何本ぐらい植えるのか教えとかないかんて」という指摘もあった。あらかじめ指導しておけば確かに教師の負担は少なくなるが、「子どもの思いや行動を大切にして、失敗をさせることで、困難を解決する力を育む力を高めたい」という思いで活動を行った。田植えでは失敗はしたが、それ以降「自分たちのお米を大切に育てる」という気持ちが高まり、夏の水やりや雑草抜きも進んで行えた（夏休み中も自分たちで管理した）。

また、1年間のまとめの学習発表会では、毎年行っている「米作りで学んだ調べ学習の発表」ではなく、自分たちの米作りのストーリーを劇化して、全校児童に発表した。

この劇も、自分たちで大道具やシナリオ作りを行い、私はただ、子ども達の必要とする道具を集めて渡すだけであった。子ども達の成長を感じた。

こうした学びを子ども達主体で進められたのも今回提案のあった2人の先生が大切にご実践された、「子どもの発意を大切に」「遊びの中で子どもは自ら課題を見つけ解決する」と感じている。



1年の歩みを劇で発表する

21 世紀型の学びを構築するには、やはり、教師主導の授業を改め、「子どもを軸足に考える」ことが大切であると再認識した。来年度も何か 1 つ新しい動

きを作りたいという「発意」を高めたラウンドテーブル 2022 であった。ありがとうございました。

生活から教科へ、教科から生活へ —Zone A に参加した感想—

福井南特別支援学校 大田 春那

Zone A では「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う—多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る—」というテーマのもと、初めにお二方の実践を拝聴した。軽井沢風越学園の片岡先生からは、年少～小 2 の子どもたちが自然に囲まれた生活・遊び・暮らしの中で学び、育つ姿が生き生きと語られた。物事に気付いたり、試したり、考えたり、深めたり、伝えたりする子どもたちの姿、そしてその子どもたちを見守り、支える大人たちの工夫と葛藤があった。福井県立武生高等学校の室井先生からは生徒の学びを支える教師の自主的な組織「授業改善プロジェクトチーム」のこれまでの取り組みや生み出された価値について語られた。家庭科×英語、世界史×物理などの教科横断授業、自分で計画を立てたり自分の力を正しく認識したりする「自走力」を育むための授業などのチームで取り組んだ授業実践や、授業改善プロジェクトチームで活動することで授業力向上や教員同士の交流が得られたとのことだった。

後半のグループ協議では、生活と教科のつながりについて話が深まった。私が特別支援学校で経験している「遊びの指導」の中での子どもの変化、技術と

家庭を重ね合わせた学習の提案、総合的な学習の取り組み方など。その中で、生活に密着した未分化な学びから教科的な分化した学びを経て、再び学びを合わせて生活を形作っていく、という子どもたちの姿が見えた。生活の中から教科の視点を持つ姿勢、教科を通して生活を見つめる姿勢が教師には必要だと感じた。さらに、具体的に子どもの生活について考えると、決して同じ生活を過ごしている子はいない。目の前の子がどのような生活を送り、何を見て、考えているのかを、見て、聴いて、想像していくことが大切だと改めて感じた。

素敵な実践報告を聞いていると、時に「そのような学校だからできる」「そういう人が周りにいれば」と思ってしまうことがある。しかし、よく聞いていると実践報告をしてくださっている方たちも、普段私が感じているような葛藤や難しさを抱え、小さな工夫とアイデアと継続と…いろいろなものを組み合わせて、毎日取り組んでいるのだと分かってくる。今回のシンポジウムで話されていた「子どもこそがつくり手」「すべては子どものために」の言葉を私も心に刻んでいきたい。

2月ラウンドテーブルに参加して ～自走する組織を目指して～

福井県立武生商業高等学校 野口 大輔

「Zone B 教師教育：働き方改革と学び合う学校づくり～組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント～」に参加した。教職大学院生として参加する最後のラウンドテーブルであると思うと、感慨深いものがあつた。このように執筆の機会を与えてくださったことに感謝する次第である。

〈福井県教育庁教職員課・刀祢敬則主任〉

「引き出す教育・楽しむ教育実践事業」について、詳しく知ることができた。県下の多くの先生方が、新しいことにチャレンジしている現状を知り、さらにこの制度が認知され、教職員がいろんなことに挑戦でき、制度利用の競争率が高まっていくような現場になっていくことが理想であると感じた。定年退職を迎える教員が年々増えていくなかで、若手教員の育成を含む教員の指導力・授業力等の向上が急務となっているが、業務改善とのバランスを取りながら、教師力向上を推進するため県内の自主研究活動を支援していくこの制度がさらに発展していくとよいと感じた。

〈勝山鹿谷小学校・寺島亮太先生〉

「つながる学び、広がる学び～ICTの活用から見えてきたこと～」と題しての報告があり、小学校でのICTの取り組みについて、詳しく知ることができた。児童数70名という規模の小学校で、教職6年目の寺島先生が中心となって、Googleやロイロノートなどを活用し、タブレットを介し、ベテランと若手の理想的な交流を図り、学び合う集団となっていることが素晴らしいと感じた。目的と手段をしっかりと理解し、タブレットを利用したICT教育の在り方を模索し続けることが大事であると感じた。

〈東京麹町中学校・羽生裕美先生〉

福井での教員経験が豊富な羽生先生が、麹町中に赴任され、さまざまな取り組みの中で、感じたことを伝えていただき、とても参考になった。日本の中心と

もいえる麹町に校舎を構え、全員担任制など、革新的な取り組みを行う中学校で実際に勤務される中で、福井との共有点や、福井に戻って取り入れることができるのかなど、自分も同じような意識で話を聞くことができ、非常に興味深かった。

〈敦賀高校・山本泰弘校長先生〉

約15年前、敦賀高校2年目だった自分と同じ学年会で大変お世話になったこともあり、とても興味深く拝聴させていただいた。マネジメントする側としてどのようなことをお考えになり、敦賀高校をリードされているのかがわかり、とても勉強になった。この2年間、自分が大学院で学んできたことや、カンファレンスで語り合ってきた内容を、実際に先頭に立ってさまざまな施策として遂行されていることを知り、もう一度、山本校長先生の下で働きたいと思った。

校長先生の話の中で印象に残っていることは、「生徒自ら学んでいける力（自走する力）をつけさせるために、教員は、伴走者であり、ファシリテーターであれ」ということである。このことは、私事ながら、部活動、進路指導、検定指導において実感しており、そういう姿勢や教員の意識が必要になると確信させられた瞬間であつた。ここに書ききれないほど、様々なことを報告してくださったが、「これからの社会を生き抜くには？」という壮大な問いを、校長先生が、生徒、教職員に訴えかけている敦賀高校が本当にうらやましいと感じた。このようなマインドセットが高校の魅力化に繋がるとともに、日々の積み重ねが大事であると感じた。

教員を目指していたころ、また教員になりたての頃、自分がイメージしていた「優秀な教員またはリーダー」とは、強烈なリーダーシップやカリスマ性があり、そのリーダーの力量で、さまざまな課題を克服していける人たちであると考えていた。なれもしないカリスマリーダーを無理して、背伸びして目指して

いた。時は流れ、世の中は大きく変わった。多くの方と出会い、多くの生徒と共にこれまで歩んできた道のりの中で、確信できることは、「1人では何もできない」ということだ。以前は、すべてを自分の手で解決し、全ての生徒を自分の力で何とかしたいという気持ちが強かったのだ。しかし、いまはその呪縛から解き放たれたといえる。さまざまな経験、カンファレンス、ラウンドテーブル、課題図書を読み込み、長期実践研究報告書を執筆する中でいただいたアドバイスもあり、「共に創り上げる」意識のもと、「自走する組織である」ことが重要なんだと感じるようになった。

った。教職大学院の2年間で満了すれば、研究が終わりということではない。むしろ、ここからが重要なスタートであるとも考えている。今まで自分が知らなかった自分を知ることができ、同じように、自分の一言を、アドバイスとして捉えて頂いたこともあった。

教室でも、学校でも、グランドでも、地域でも、そして4月から勤めている教育行政の現場でも、世代を超えて、「共に創る」ことを意識してこれからまた新たな「終わりのなき旅」に出かけたいと思う。

（役職、勤務校は、令和4年2月現在のものです）

ラウンドテーブルに参加して

嶺南教育事務所 指導相談課主任 山中 太継

3月に教職大学院の学校改革マネジメントコースを修了した。終わってみると毎月のカンファレンスが懐かしく、教育について語る場が無くなったことに喪失感を感じている。そんな折、教職大学院でお世話になった淵本先生から今回の原稿の依頼を受けた。電話越しではあったが、久しぶりに淵本先生と教育についての話で盛り上がった。

2月のラウンドテーブルではZone B（教師教育）に参加させて頂いた。どの報告もとても興味深く学びも大きかった。その中から3つ紹介したい。

1つめは、福井県教育委員会 刀祢主任の『教師力向上を支援する仕組み』についてで、教員グループの自主研究に対する県教委の補助事業紹介であった。学び続ける教師（集団）であることは今後ますます求められる。県教委もそのための支援を行っているのだが、現場ではなかなか補助事業のことを考える余裕がない。どうすれば先生方に広められるか？効果的なのは教務主任や管理職を通じて後押しして貰うことではないか。嶺南教育事務所では、3月に1年間の報告を兼ねて嶺南4町の教育長を訪問している。その機会に事業について説明し、校長会等で積極的な活用を勧めていただけるようお願いした。また、2

月下旬の教務主任研修会でもこの事業を説明し、ミドルリーダーの立場から学び続ける教師集団づくりの支援をお願いした。これらは刀祢主任の発表を発端に行ったことである。

2つめは、鹿谷小学校 寺島先生のICTの活用を通じた『つながる学び 広がる学び』についてである。寺島先生は教職6年目のICT活用に堪能な先生で、タブレットを使った実践の発表であった。だが、私が心を惹かれたのは、先生が学び続ける教師集団（コミュニティ）の推進を明確に意識して実践されている点である。『自分の立場で何ができるかを考え、実践し、その実践を校外の仲間も巻き込んで広めている』このことに対して衝撃を受けた。さらに驚いたことがある。後の小グループでの意見交換の際、同じグループに若い女性教員がおられた。若い先生の参加に興味をわき、参加の動機をうかがった。すると彼女は寺島先生の大学の同期で、寺島先生から紹介されて今回初めて参加したとのことだった。正に『つながる学び 広がる学び』を寺島先生自身が体現されていることに感動した。このような若い先生のエージェンシー溢れる活動を、教育行政の立場から積極的に他校の先生方に伝えていきたい。

3つめは、敦賀高校 山本校長先生の『敦賀高等学校での10ヶ月』についてである。4月に敦賀高校に赴任してから取り組まれた様々な仕掛けや変化の様子について紹介された。中でも、先生方と共有ビジョンを作るため、最初の職員会議で行ったプレゼン資料が心に残った。過去と未来の社会を示し、『なぜ今教育を変えなければならないか?』を問い、そのために『どんな生徒を育てるのか?』を問われていた。これらは敦賀高校だけでなく、全ての学校の教員が考

えるべき問いである。後日、山本校長先生に連絡を取り、プレゼン資料の一部を教務主任研修会で活用させてほしい旨申し出た。校長先生から快諾を頂き、研修会の中で活用させて頂いた。

このように、2月のラウンドテーブルでの学びがその後の業務に直結するなど、とても有意義な機会であった。教職大学院は修了したが、6月のラウンドテーブルにも是非参加したいと考えている。

ゾーン B の振り返りとこれからの教師教育について

福井大学連合教職大学院 淵本 幸嗣

2月のラウンドテーブルでのゾーン B の振り返りをどのように書くべきか、改めて考えてみた。私は、ゾーン B の在り様を企画する立場として、ラウンドテーブルに関与してきた。しかし、これまで、そのマネジメントのプロセスや仲間との合意形成の過程については、あまり記述してこなかった。このニュースレターでも、チャレンジすることはなかった。結論から言えば、このラウンドテーブルの企画は、スタッフの同僚性を高めるために極めて有効で、組織論としても重要であることを強調しておきたい。

教職大学院のスタッフは、毎週、火曜日に2時間のFDに参加している。その中の1時間程度を使って、ゾーン B の担当スタッフがZoomで企画を話し合っている。まず、趣旨文が自分たちの求めるテーマとしてふさわしいか、毎回、修正を加えている。これは、単なる作文のレベルの話ではなく、組織として目指すべき方向性、ベクトルが語られ、皆で価値観を共有していくことを丁寧な対話によって積み上げていく。今回は、中教審の「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて審議まとめ(11月15日)に注目し、コロナ禍の中でも意欲的に実践コミュニティによる教師教育を展開している実践報告に光を当てることが確認された。

ゾーン B のメンバーは、毎年出入りがあり、新しい仲間も加わってくるので、この時間は同僚性の構

築ということでは極めて重要なものになる。趣旨文の中には、今回大切にしたいメッセージが盛り込まれ、そのことを実践している専門職がどこにいるのか話し合っていく。自由な話し合いの中で、情報交流が進み、是非、多くの人に知ってほしいと思うような実践が一つ一つ決まっていく。今回は、次のようなことに焦点が当てられることになった。コンセプトは、あくまでも「自分たちが聴いてみたい」という実践でスタッフの主体性を大切にしている。それだからこそ、モチベーションは高いものになる。

- ・働き方改革を意識して質の高い学校づくりを展開している実践
- ・コロナ禍の中でも若手を中心として、ICTを活用した協働研究を展開している実践
- ・主体的な実践研究サークルを教育行政が予算をつけて支援している実践

いろいろな研修が企画されているが、やらされ感のある研修では、モチベーションは上がらない。仲間と共にプロジェクトを企画するスタンスが肝要である。このような取り組みをサイクル化していく中で同僚性やコミュニティの質が高まっていく。こうした変化は実践の評価であり、組織マネジメントの成果でもある。

趣旨文が決まり、登壇者も決まった後に、学び方についてもチャレンジングな改革が行われた。以前の

ラウンドテーブルでは、当日、資料が提示されて、いろいろなプレゼンが報告されていたが、今回は反転学習のスタイルを取り入れて、資料等は事前に配布しておいた。当日は、論点やポイントを絞って話題提供が行われ、スタッフからのインタビューが企画された。このインタビューは、とても新鮮で質問したいことの深掘りが可能となり、Zoom のチャットへの書き込みも格段に増えた。後日、ありがたいことに実践報告者から丁寧な回答が送られてきた。対面ではなかったが、真に聞きたいことや伝えたいことのやり取りができたことに手ごたえを感じた。このスタイルは、次のラウンドテーブルでも継続していきたいと考えている。

第一部の実践報告を受けて、第二部では少人数でカンファレンスが行われた。私のチームには、報告者の勝山市立鹿谷小学校の寺島教諭がおられた。その話し合いの中で強く印象付けられたことは、以前、教職大学院の修了生の北川校長が、ラウンドテーブルで実践コミュニティづくりの報告をされたが、その学校において寺島先生のような若手が確実に育って

いるということである。管理職が、学び続ける教師集団のコミュニティを心地よいものにしていくことで、次の世代が自由にのびのびと学び合い、学校の中はもとより学校の枠さえ乗り越えて共に育っている。教師教育の改革は、単発の研修の成果で成し遂げられるものではなく、日常的に学び合うシステムが組織の中にあることが重要なことを学校の実践報告から教えられた。このような姿こそが免許更新講習後の教師の学び直しの姿であり、フラッグシップ大学としての福井大学連合教職大学院が目指してきた教師教育に他ならない。

今回、大学と学校と教育委員会が教師教育に関する緊密な連携を行うことで、専門職である教師の資質能力が高まることが確認できた。その確認の場の一つがラウンドテーブルであり、多様なメンバーとのコラボレーションの中で新たな気づきがあり、今後の展望が拓かれていく。このような学び合うコミュニティの必要性を今後もいろいろな場で発信していきたい。

ラウンドテーブルに参加して

北海道旭川市地域子育て支援センターぱれっと 岡本 千晴

前職の同僚に誘われたことをきっかけに、ラウンドテーブルは、2 回目の参加となります。今回も学び多いラウンドテーブルでした。貴重な時間をありがとうございました。福井県には残念ながら行ったことがなく、ラウンドテーブルに参加をさせていただく事で、福井ってどんなところだろう？と、福井県を調べ、行った気分で参加をさせていただきました。

私の参加した「Zone C」は、教育関係の方、学生の方、公民館関係の方など、色々な分野の方が集まっている事もとても新鮮です。私事ですが、現在、地域子育て支援センターで勤務をしており、その他、地域活動として、「子ども食堂」という子どもの居場所づくりを行っています。併せて、旭川市内と近郊の子ども

食堂や学習支援、プレーパークといった、子どもの居場所づくりをしている人達とのネットワーク（横の繋がり）の構築と、子どもの居場所に「行ってみたい」「応援したい」「作りたい」という方々を繋ぐ、子どもの居場所を持続するための中間支援的役割の活動も行っています。なので、Zone C の持続可能なコミュニティというテーマはとても興味深く、自身の仕事と地域活動と重ねて話を伺っておりました。

これからの若者と、仕事や地域活動で、繋がる事を課題と感じているので、峯森先生の「学校を地域に開くということ」を伺いながら、旭川では、どうやって「高校生」と繋がり巻き込むかを考えていました。また、松平先生の「里山起業論」は、旭川とリンクする

事が多く、私が、旭川でできることは何なのか？価値ってなんだろう？と、真剣に考える時間となりました。

お二人の話を伺った後、そして、小グループの先生方とお話をした後に、何事にも全力で取り組んで、楽しんで生きる大人でありたいとワクワクするものが、内側から湧き上がってきました。旭川の若者達が、「地域とつながりたい」「自分もこんな大人になってみたい」と思えるような「カッコいい」（カッコつけという意味ではありません）大人になろう！私自身が一歩を踏み出す勇気を頂いたように思います。

「ラウンドテーブル」は、自分には持っていない皆さんのアイディアに触れる事ができ、仕事にも、地域活動にも活かせるヒントが沢山つまって、視野がグ

ッと広がる良さがあると思います。そして、色々な方の話を拝聴することで、自分では気付いていない新たな視点を持つ事ができるところも良い点だと感じています。毎回、終わる頃には、熱量が高くなり、興奮さめやらぬ状態になりますが、終了後、富永先生が、参加者の皆さんとの時間を大事にして下さる事で、クールダウンし、温かい気持ちへと変化していきます。

今回のテーマである「つどい、つながり、新しい価値をつむぐ」を、北の大地旭川で、多くの人と繋がり、集うことで、旭川の新しい価値を見つけ、紡いで行きたいと思います。次回のラウンドテーブルを楽しみにしています。

コミュニティと共に生きる

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 仲村 俊太郎

今、私たちが生きる社会は多様性の尊重が広がり、自由や平等における他者との対立は身近な課題である。そのため、他者と共に生きていく上で、互いに理解し合い、対話を通して納得解を形成していくことが求められている。それと同時に、他者と共に生きることは自己の成長にとって必要不可欠な営みである。しかし、職場と自宅を往復する生活のような必要最低限のコミュニティへと縮小が進む中、さらにコロナ禍によって他者と個人が分断される状況になっている。来年度から新たなコミュニティに参加していく私自身、多様な他者のいるコミュニティと共にどう生きていくべきなのか問い直したいと思い Zone Cに参加した。

Zone Cでは全体報告者による報告後にグループセッションが行われた。幸いなことに私のグループには全体報告者のお一人である地域活性化事業をされている方がおり、これからコミュニティにどう参加していくとよいのか相談してみると「義務感や責任感で地域に参加していくと、楽しさがなくなっていく」「学校で地域に参画していくことを教え込むと、

（コミュニティへの参加は）続いていかないだろうな」と語ってくださった。これを聞いて、自分がコミュニティに参加する意義には自己の成長がほとんどで、自分の楽しさを目的にした参加ではなかったなと気付かされた。本稿を読まれている方の中にも、仕事や地域の集まりへ行く目的として「楽しさ」や「安心感」を得るためとは言えない方もおられるのではないだろうか。社会の中で暮らしていると、どうしても周りに合わせなければいけない、求められていることをやらなければいけないという目に見えないものに縛られてしまいがちであるが、自分自身や家族の人生が楽しいことを大事にし、それを原動力にして強く生きていくという生き方をしてもいいんだ、やってみたいと感じた。また、他者と集い、繋がっていくことに対して「ちょっとした集まりやちょっとしたことでいい。それをずっと続けていくと、繋がるきっかけが出てくる。するとだんだん関わりが増えてきて、いいなと思うように。成功を求めない、とりあえず行ってみる、やってみる」とアドバイスを頂いた。コミュニティに参加していくにしても、それ

ぞれの立場や状況がある。自分のペースでいいから、コミュニティに参加してみることにし、参加し続けていくことも大切であることを心に留めておきたい。

グループセッションでは、他にもメンバーを受け入れる側の課題や他者と話してみると意外な気付きがあることなど、様々な話題が飛び交った。今回のラウンドテーブルに参加して、新しい気付きや良い刺

激を得ることだけでなく、これからコミュニティとどう共に生きていくのか前向きに考えることができた時間だった。それは、自分の弱みや悩みを話しやすい安心感のあるグループであったことも大きい。私は本年度で教職大学院を離れるが、楽しさ・安心感のある1つのコミュニティとして今後もラウンドテーブルに参加していきたい。

「出会い」 zone C

福井県立福井商業高等学校1年 半田 智咲

「福井大学主催のラウンドテーブルに参加してみませんか？」福井市中央公民館の河合先生に紹介していただき、興味が湧き参加させてもらうことになった。経験豊富な大人たちに囲まれて初めて参加したラウンドテーブルは貴重な経験となった。

Zone Cに参加させてもらった。福井県立丸岡高等学校の峯森先生と一般社団法人こしのくに里山再生の会の松平さんのご講演を聴いた。峯森先生の講演で印象に残っている言葉がある。「Nothing is unrelated to life」（人生に関係のないものなどない）という言葉だ。私達が生活し活動を行う中で多くの物事が密接に関係しているのだと感じた。また、地域協働部のお話では、生徒の自主性を大切に高校生が自ら考え実行する地域まちづくり活動をされていると知った。私は学生まちづくり班に所属し駅前活性化に向け活動している（＝ストリートパーク建設に向けた地域まちづくり活動）。峯森先生のご講演内容から地域協働部の活動が素晴らしいと感動し、同世代の活動にとっても興味が湧いた。そして今度、ご連絡が来次第、活動見学をさせてもらえることになった。

松平さんの講演では挑戦することの大切さを学ん

だ。林業のお仕事を本格的に殿下地区でされるまでの体験されてきた内容のお話は驚きと感動でいっぱいだった。自分の「好き」を大切に、実行される行動力・挑戦する力に圧倒された。挑戦することに必要な初めの一歩＝大きな勇気こそが自分に対して成長・経験・知識などを与えてくれるのだと考えた。私自身も規模は大きくないが学生まちづくり班の活動を通して実際に感じたことだ。松平さんのお話にあった「福亥軒」の猪ラーメン・鹿ラーメンを来年こそは食べに行ってみたいと思う。

グループセッションでは経験豊富な大人の方々と意見交流をした。自分の意見を伝えることの難しさを感じたが、色んな方の考え・価値観を共有し新たな知識・考え方を知ることができた濃厚な時間であった。日頃お話できない方と話すことで物事を考える視野が広がる良い機会になった。

ラウンドテーブルは多くの方々と出会える居場所だと考える。出会いが昨日の私より今日の私を成長させる。私は今回多くのことを学びこれからも多くの方と出会い成長していきたい。だからこそ来年度6月のラウンドテーブルにぜひ参加したい。そして新たな出会いに感謝し明日の私の人生を歩んでいく。

ラウンドテーブルに参加して

東京農業大学 地域環境科学部 生産環境工学科 岡本 尚子

実践研究福井ラウンドテーブル Zone E では、12 時ごろから全体で任意のアイスブレイキングを行い、13 時からブレイクアウトルームを用いて主に 3 つのプログラムを行った。

初めに、学生たちの研究内容をブレイクアウトルームで各班に分かれて、発表会を行った。

私の班では、小学生と高校生がそれぞれ「今まで社創でやってきたこととこれからやろうとしていること」と「おい町の活性化」というテーマで発表を行い、数分間の質疑応答を含むディスカッションを行った。

二人の発表を通して、二人の行動力の高さにとっても驚いた。小中高時代から自主的に活動をしており、自身が考える目標に試行錯誤していることや、想いが強く伝わってくる素晴らしい発表だった。

次に、再度全体のルームに集合し、2 つの団体の方による発表と数名の方によるディスカッションが行われた。発表では、まさに実際に取り入れられている新しい学校様式を紹介しており、敢えて椅子を無くした授業風景や学校とは思えないクリエイティブな校舎、そして積極的な生徒会活動の様子の数々に驚いた。

最後に、全体での内容も踏まえた上で「新しい学校の“〇〇”」に関して“お題”をもとに各ルームでディスカッションを行い、一部全体のルームで発表を行った。お題にはそれぞれ“環境・きまり・活動・メンバー”があり、各ルームによって振り分けられていた。私たちのグループでは“きまり”について話し合

い、スライドにまとめた。最初、それぞれが考える校則の在り方について確認を行ったところ、やはり縛られない自由な校則が良いという意見が多かった。しかし、校則がないといじめなどの問題が発生してしまう可能性もある。そのため、私の担当したチームでは、誰も嫌な思いをしないように、先生が生徒の考えを尊重して規則を決めていく方向性に決めてまとめを行った。

“きまり”というテーマは個人の価値観によって大きく異なるため、大変難しいテーマだった。そのため、議論もとても白熱し、発表の時間ギリギリまで話し合っていた。私の担当した班はほとんどが高校生の方で構成されていたため、学校の校則も自然と髪色やメイクなど高校生ならではの内容だったが、これが小学校の校則だった場合など、対象としている年代を変えることで議論もさらに広がるのではないかと感じた。

全体を通して、小学生の方から教育関係に携わられている大人の方まで幅広い年代の方と同じ問題についてディスカッションするという大変貴重な機会だった。今回私は大学生のチームアシスタントとして参加したが、自分も積極的にディスカッションに参加させていただくことができ、自分の考えを発信し、同時に様々な価値観や意見を知ることによって私自身の考え方の世界も広がった。考え方を豊かにしていく、これこそが学ぶ楽しさなのではないか。この活動を通じて、様々な年代の方と関わることで、改めて学ぶ楽しさに気付かされた。

参加すると 何かが起こるよ ラウンドテーブル

福井市森田中学校教諭 木下 慶之

2 年ぶりに福井 RT に参加することができました。2 年前はかろうじてコロナ禍が始まる前で、福井大学

会場にて同僚たちと一緒に参加し、いろんな方々と交流することができましたが、以後はオンラインが

苦手な私は参加を躊躇していました。しかし、RTに参加すると、何かしら新しい気づきや出会いがあり、次なる実践への萌（きざし）が芽生えるものです。

今回は意を決して、この2年間で共に歩んだ同僚や子どもたちとの実践記録を携え、2日間の全日程に参加することに挑みました。

1日目はZone E「探究」に参加。当初は、本校の各学年の子どもたちや同僚も一緒に参加しようと企画していたのですが、参加直前にコロナウイルス感染症対応という慌ただしい波にのまれ、断念してしまいました。

学校のみなをRTに誘うって難しいですね。その流れをつくったり、士気を高めたりするのがなかなかできない。勇気が出せない私はみなを誘うのに直前まで怖気付いてしまい（ポスターは配ったものの）、参加申し込みができずにうじうじしていました。

そんな中、子どもたち（福井高専に進学が決定した3名）が、「先生、参加しましょう！」と、弱気な学年主任の私を励ましてくれました。木村優先生は超直前申し込みにも関わらず快く、かつ丁寧にご対応ご配慮くださいました。ありがとうございました。そしてごめんなさい。

さて、子どもたちとは発表についてあまり打ち合わせはできず、当日を迎えてしまいました。さらに、

私は別のグループのファシリテーターを務めることになり、彼らの発表を結局見ることができませんでした。翌日、「無茶振り参加させてしまい申し訳なかった」と伝えに教室へ行くと、彼らはストーブの周りで「RTでこんな学校があったんだ」「森田推し隊紹介してきたよ」と仲間たちに実践報告をしているのでした。「先生！お疲れ様！私たちががんばりましたよ」「もっとうまく話したかったな」「先生の姿もモニターで見えていましたよ」「貴重な経験になりました」と、温かく感想を報告してくれました。報告を聞いていた他の生徒からは「なんで僕も誘ってくれなかったのですか！」「僕も坂井高校へ行ったら、誘ってください」との声も。他校と交流したり、実践を発信したりすることについて、彼らは予想以上に興味や関心をもっていることに気付かされました（億劫になってしまっているのは実は私たち大人の方なのか）。

彼らとは、この2年間コロナ禍ではありましたが、一緒にいろいろプロジェクトを経験し、子どもも教師も、学びと成長を実感することができました。詳細は省察的实践研究会論文集第2号に寄稿しましたので、ご覧いただけましたら幸いです。子どもたちの活動誌は森田公民館や森田中学校で入手できます。

（WEB上でも公開

<https://sites.google.com/view/moritaoshitai>）

実践研究福井ラウンドテーブル 2022・スプリングセッション を終えて

北照高等学校教諭 河邊 隆大

このラウンドテーブルとの出会いは、同僚の号刀先生からの紹介でした。初参加のときには、既に新型コロナウイルスの感染が危ぶまれており、オンライン開催でした。教員研修の経験もそれほどなかったため、とても緊張したのを覚えています。

そんなラウンドテーブルへの参加で、本当に沢山の「人との出会い」を体験させていただきました。こ

の「人との出会い」は、私立学校に勤める私自身にとって、貴重な体験であり、宝だと感じています。

そして今回の、福井ラウンドテーブルでは、実践報告者としての依頼もいただき感謝しております。報告するにあたって、これまでの活動やその意義などについて振り返る機会にもなったと感じています。報告後には、参加者の方々から質問や、アドバイスを

いただきました。現場でこれまで頑張ってきたものの、活動が本当に学校の為になっているのか不安な想いもありましたが、ラウンドテーブルを終えるころには、「また頑張ろう」と気持ちをリセットし、新たなアイデアも出てきていました。日頃から、試行錯誤をして、工夫をしているつもりでも、自然と人の考え方は偏りが生じることも学ばせていただきました。

また、物事の捉え方や視点、考え方について多くの刺激を受けています。今回は、これまで教員歴を積み重ね、自身のこと以外に周りのことや、組織のことについても気になっていました。そのため、Zone では、

組織に関するものを選択し実践報告を聞いたり、沢山の意見を聞いたりして、学びを深めました。ここで得た、新たな視点や捉え方を現場と照らし合わせ、現状の課題はなにか、もっと良くするためにはどうすればよいかなど、自身の人間としての幅が広がっていることを少しずつ実感しています。

今後は可能であれば、同じ志を持てる教員を増やし、ラウンドテーブルと一緒に参加すること、現職の状況の改善により一層関わっていけるよう尽力したいと思います。この度は、貴重な経験を誠にありがとうございました。次回のラウンドテーブルも楽しみにしております。

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2022
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2022 Summer sessions

18(sat) 10:00-17:40

19(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）総合研究棟
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2022.6.18-19

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

後援 福井県教育委員会

独立行政法人国際協力機構北陸センター

online-offline hybrid sessions with Zoom

実践研究 福井ラウンドテーブル 2022 Summer sessions

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

6/18(sat) 10:00-17:40 (Zoom 接続開始 9:30)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 10:00-12:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために
更新制講習以後の研修改革の展望をどう描くか

Session II

学校・教育・地域を考える 5 つのアプローチ 13:00-17:40

13:00-14:00 は全体でのポスターセッション、各 Zone のセッション開始は 14:30 から

- A 学校/インクルーシブ: 21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
ー多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培うー
- B 教師教育: 働き方改革と学び合う学校づくり: 組織コミュニティ・カリキュラムのマネジメント
- C コミュニティ: 持続可能なコミュニティをコーディネートする
ーつどい、つながり、新しい価値をつむぐー
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究: 学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたが好みをみんなでかんがえよう
ー学校新設(がっこうしんせつ)!? プロジェクトをはじめよう PART2ー

6/19(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。
地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で
一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。
言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し
合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。
実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培わ
れていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●Zoom による開催になります。詳しくは下記の教職大学院ホームページをご覧ください。

●参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。

次の URL から申し込み可能です。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScg2mnC2b5zC33XbWmqUNky05DnnrHwERmVyt_bWw7oOqPrpQ/viewform

●6/19 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

●6/19 の session III の参加についてのお願い=午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。
そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。
原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。

プログラムの変更等があり得ます。

最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2022.6.18-19

by FK 20170520

Schedule

5/17 Tue. 運営協議会

5/21 Sat. 月間カンファレンス A 日程、5/28 Sat. 同 B 日程

6/18、19 Sat. Sun. 実践研究 福井ラウンドテーブル 2022 Summer Sessions

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】2022 年度がスタートして 2 か月以上が経ちました。スタートの 4 月、行事の 5 月、学校は常に忙しくなかなか余裕が生まれませんが、1 年を通してみると 6 月は、学びの時期といわれます。今年度の自分の目標をもう一度見直してみる、これまでの授業をちょっと振り返ってみる、そんな立ちどまりの機会に、ラウンドテーブルはいかがでしょう。今回は対面も可能な場面が増えました。ぜひ、たくさんの方々とともに、学びを広げて深めましょう。

教職大学院 Newsletter No.159

2022.5.21 内報版発行

2022.6.10 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1